325
344

始

重須乃森

鹽野翠雲作

帝國圖書館藏

大正
4. 2. 20
内交

序

予平生の所考は聊か世間に傳ふるものと異なる。蓋し、聖祖の御在世に於て重要なる二箇の御付囑ありき。一は朗尊に鎌倉比企谷を、一は興尊に駿河の富士を。前者は當時日本國の首府として宗門弘通の中心地點たるが爲め、一は未來に建立さるべき本門戒壇經營準備の爲めなり。然れば宗史に聖祖滅後興尊始めて延山を分離し富士に據られたりなど書けるは眞正の史實としては一向價値なきも

のなり。富士本門寺の名は、聖祖の御在世已にこれあり、又六萬坊の地引は興尊親しく聖祖の意を承けられたるもの、總じて富士の事は一々皆御在世よりの經營なり。豈に興尊獨創の私事ならむや。但し延山と不和云云は御墓輪番に就て檀那波木井殿との異見なり。御墓輪番は、聖祖の御遺旨なるを其を波木井殿が變更したるは、剛毅純直なる興尊の絕對に否絕し給ふところ、由りてそれよりは斷然延山を看捨てられしなり。然りと雖も是の事は富士の經營とは自ら別なり。況して一器の法水に何の異執ある可けむや。故に興尊としては波木井殿の事ありしに拘はらず益益勇猛精進に畢生の力を富士の經營に効して以て、聖祖の御付囑に酬應し給ひけるなり。然るを末徒等之を念はず互に他を毀傷せむとして、各々種々の事柄を構造し、竟に久しく宗門の史實を誤り傳へしめたること、返す〳〵も悲む可し。

予若し機を得なば委細に所考を悉くさなむとして未だ果さず。偶々鹽野兄の『重須の森』を著はせるに感ありて乃ち其の一端を記す。

宗門各派統合の訂盟成れる聖なる

大正三年十二月二十七日大崎に於て

慈龍學人　清水梁山

序

『重須の森』成る、大段三章、節を分つもの三十六、字句洗練、行文流暢、讀者をして卷を終るを覺えざらしむ。是れ日蓮宗大學生某が、處女作として江湖に面接せんとするものか。金玉の聲は乃ち未だしと雖も、史眼爛々、惠燈耿々、その脫兎の如き筆勢や、奔放禦るべからざる者あり。蓋し創作と謂つべし。

於戲、吾が翠雲や、寒陋の一措大にして、無名の文士なり。今や一躍して有聲の操觚者たらんとす。その事業文章と永く磨せず。眞に不朽の盛事なる哉。

大正四年丁卯の一月　安良日將

自序

日蓮上人は太陽のそれだ、而して三稜鏡(スペクトル)から篩(ふる)び濾(こ)されたものが六上足だと私は思ふ。光と色との交渉は上人と上足との間にも成立つ、而して三稜鏡(スペクトル)はイリユージヨンに過ぎないと私は思ふ。この想像は誤つてゐないであらう、確に誤つてゐないに違ひない……恁うした心持て私は書いた。然共、拙い私の筆は或はその氣分さへも表はしてゐないかも知れない　それは總て私自身の力のない事を示したもので私自身の心持とは全く別であることを許して頂きたい。

作者誌す

重須の森

鹽野翠雲

一

大井光重が、鰍澤の長を勤めるやうになつたのは、寛元元年の二月からであつた。

而して、彼が駿河の河合から妻を嫁つたのも、その頃であつた。妻は薫と云つて、由井善清の妹であつた丈けに、女としての躾は、これと云つて非難を打つ所がなかつた。かと云つて唯だ徒らに夫の言葉に盲從すると云ふ譯ではなかつた。彼女は、夫と自分との立場を明瞭にする事の外には、餘り考へなかつた。

てあるから、二人の間に衝突の起るべき筈もなかつた。然共、それが爲めに、互の間に冷い溝渠が出來るやうな事も決してなかつた。醇厚な自然の理解とも云ふべき、如何にも穩やかな溶和てあつた。二人は、唯だ何となく戀しいと云ふ心の外には、別に甘い戀のやうな言葉も持つてゐなかつた。

澄み切つた春の朝など、光重は、緣端へ出て美妙な自然の秘れた力をしみ〴〵味はつたりした。

紫水晶のやうな遠い國境の連山の上に、幻の如く浮出た富士の白雪を仰いて、言葉もなくうつとりする事があつた。殊に足下を右に左に縫ふて迸しる富士川の水が、散つては咽び碎けては渦卷くのを見ると、自づと心が緊張つて來るのを感じた。

時としては彼は朝靄の垂籠めた庭に下りて、降り積つた落葉を掻集めるやうな事があつた。すると朝餉の支度を濟した妻が、漆のやうな黒髮を筧の水に浸

してゐるのが瞥見られた。而も、彼等の僞らない心の姿は靜かに震ふ燈火の下て見出されるのてあつた。机に靠れた夫と、燈火を挾んで妻が運ぶ微かな針の音が聞かれた。

斯うした靜かな、併し溫かい生活は純朴な村人から何時も羨望の的になつてゐた。時折訪ねる村人は、開放した彼等の心に醉はされるのが常てあつた。

星は遷り歲は回つて、寬元四年の春はこの閑雅な山里にも訪づれて來た。堅く竦んてゐた草や木が何時か脹らんて、何處となくのんびりとして來た。鶯の聲に眼醒めた梅花は、雪にも挫けなかつた操の果實を結ぶべく微笑むやうになつた。

死んだやうなこの小天地が蘇生つて來た時には、叢の身體は例ならず重くなつてゐた。

これに氣付いた人々は、一日も早く身二つになつて、互に肥立ちの速やかて

あるやうにと、心竊かに祈つた。その心の中には、軈て生れて來る子供に對する好奇心も混つてゐた。

それは三月七日の黄昏であつた。食事を了へて針箱を持出した薰は、全身云ひ知らぬ氣怠るさを覺えて、針箱を楯に眠むるともなく目蕩んだ。

その翌日子供が生れた。

まる〳〵と肥つた男の赤坊は、人々の手から手へと抱かれた。『愛らしき男子よ！』と、口々に繰返された。

寢そべり乍ら薰はつく〴〵我兒の顏に見入つた。生れて間もない皮膚は、赤く血走つてゐて、如何にも痛々しく見えた。然共、なだらかな輪廓と細い曲線を以て圍まれた恰好のいゝ鼻とが快い調和を作つて、彼女には低い乍ら調つた音律さへも聞かれるやうな氣がした。光重は、何時の間にか眠入つた子供の顏を覗いてゐると、微かな呼吸の音にだん〳〵引入れられるやうな感じがした。

門まで人々を送出した光重は眼の限りを見渡した。冴え切つた穹窿には白い些かばかりの雲が、宛然天女の舞ふ姿のやうに浮いてゐる。遠く延びた小波のやうな山々も光りを帶び、ぽつ〳〵と散らばつてゐる家々も生氣が溢れて、僅かに限られた鰍澤の村は急に平和に充ちた愛の國のやうに思はれた。

この子供は餘り泣かなかつた。

歡喜の裡に七夜は過ぎて、薰の身體は一日々々と舊に復して行つた。光重は相應しい名もあらばと、探しに探し貫いた揚句、到頭『蓮華麻呂』と呼ぶ事にした。『蓮華麻呂！』薰は幾度か聲に出して口號み乍ら、軈て子供の顏を覗き込んで『蓮華麻呂！』と呼んで見た。人の聲に慣れない子供は、呼ばれる度毎に奇異な眼を瞪り乍ら、咿々と答へるものゝやうであつた。

日增しに、子供の大きくなつて行くのが眼に立つた。けれども、仍且、泣い

て親を困らせるやうな事はなかつた。その泣かないのが又た兩親の氣になつた。それて半日も凝乎してゐるやうな時には、光重は、ふつくらと溫い母の慈愛の綿の這入つた搔卷に包んで、家の周圍を步いたりした。すると、黑い瞳をぱつちり開いて物珍らしさうに、外の景色を見廻すのであつた。その邪氣ない明純な瞳に空の色や樹木の綾が溶け込んでゐても、無心に瞻仰げてゐる白い護謨毬のやうな顏を見ると、美妙な、と云ふよりは一種崇高な感に打たれるのであつた。其麼な時は思はず固く抱占めてゐるのに氣付いて、はつとするのであつた。

二

親となり子となるさへ假初ならぬ緣纒であるのに、恁うした優しい子を持つた夫婦はこよない幸福を壽いだ。唯だこの上は一日も早く健かに生ひ立つやうにと心に願つた。子供の行末が光榮ある事に依つて自然と世の濁れを澄し得る

ものならば、活き延びて益もない自分自身の生命は抛つのも厭はないと思つた。未來に我兒の光明を繋いでゐる兩親は、纖弱い人力の動かすべくもない運命の不可思議に驚異の眼を瞠りつゝも、なほ限りなき神佛の力を讃美する事を忘れなかつた。であるから、時を語る鷄の聲は聞かない事があつても、子供を抱く光重の姿を靜寂な寺と鎭守の森に見出さない朝とては一日もなかつた。

溫かい心と心との飽和から生れ、心からの育みに蓮華麻呂の發育は驚くべく速かであつた。

その年も最早餘日が少くなつた。

每日々々灰汁のやうな濁雲が徂徠して、何時の間にか白根山も雪に蔽はれて了つた。光重の家の周圍は始終吹雪が迷つて、雪の下行く水の音も鈍つて來た。

それは常になく靜かな霽れた朝であつた。

例のやうに光重は子供を抱いて外へ出た。堅く凝つた雪路は一足每に微かな

音を立てた。大鳥井まで來た時には身體中の血管が膨上つて、汗が滲んでゐた。老ひ疲れた杉樹立を通り貫けて拜殿の前で立ち止まつた。注連繩や白い御幣が吹雪のために骨ばかりになつてゐた。

霎時彼は石の如く立竦んで默禱を凝らした。たゞならぬ心願を胸深く秘めてゐる彼に取つては、聲や形で神意を動かさうなどゝは思ひも寄らぬ事であつた。――限りなき生命を我がいとし兒の爲めに與へられよとではない、自分に定つた殘る幾年月と力とがあるものならば、この上に生の流れを此世に形作るべき運命の下にあるならば、神靈の神祕な偉力からして唯だその場所を移す事を許されよ。死は神と人との間に横はると思へば、決してそれを呪ひ恐るゝ譯てはない。その不可抗な死を根こそぎにする愚かさを憧憬れるのではない。徒らに生きて甲斐もない生命に噛り付いて、世を飾り得べき我兒の前途を阻むよりは、潔く皺枯れた呼吸を吹き切つて、自由な天地の間に生れ乍らの我兒の翼

を擴げさせたいと希つたのである。

やがて光重は夢から醒めたものゝ如く、眼を瞠つて我兒の顔を見た。子供は何事かを呟ぐものゝやうに口を蠢かしてゐた。

『いざ歸らうよ。』

彼は靜かに抱替へて踵を廻らした。

何時の間にか柔和な曙光が並木を透して流れて來た。山も谷も一樣に雲母のやうに光つて、道は紙魚が喰つたやうに黒く沈んでゐる。

濕りを帶びて來た足下に氣を配り乍ら橋の袂まで來ると、遽かに子供が泣出した。小ひさく搖り乍ら宥めやうとしたが、殉死者のやうな悲痛な叫びは烈しくなるばかりであつた。

ふと、彼は張詰めた溪川の上の眞白な雪の中に奇蹟のやうに黒い穴のあるのを見た。と、其處には十歳ばかりの女の子が落込んでゐるのであつた。『さて

は……』と心の中で點頭き乍らその子を引揚げた。ガラスの破片のやうに鋭く尖つた氷の下には、氣味の惡い音を立てゝ黯く水が流れてゐた。

この事があつてから、兩親が子供から享ける神祕的な感じは一層色を増して來た。

誕生日を迎へる頃には、蓮華麻呂は手の助けを借らないで自由に立居が出來るやうになつてゐた。片言交りの談も兩親には能くその意味が了解された。その中でも宮とか寺とかに關した可憐な意志の表現が最も多かつた。それはある長雨の後の事であつた。寺へと志した光重は、浸水のために橋が流されてゐたので、止むなく迂回せなければならなかつた。其麽な事にまで想ひの届く筈もない子供には、父が迷つたとしか思はれなかつたのか、燕のやうな聲で父を詰つて、平和な家庭に温かい漣を漂はせた事があつた。

獨りで箸の上下が出來るやうになつてからは、佛前に茶湯や御飯を供へて掌

を合す事を忘れなかつた。

殊に蓮華麻呂が好んで遊んだのは墓場であつた。灰色の冷たい石塔が混亂れて、雜草の生ひ繁つた陰氣な處で、友と云ふ友もなく父や母を相手に、倒れた石碑を起し切れないで泣いたりした。閼伽を獻けた母を見た子供は、廣い墓地に居並ぶ總ての石塔に水を灑ぐべく柄杓を握つた。母がいろ／＼と賺しても騙しても何うしても聞かないで、到頭四邊が仄暗くなつて父が態々迎へに來た事さへあつた。彼や此やを思合はせて兩親は、暗い氣分で時折り細々と語合つてゐる事があつた。餘りにそれが子供らしくない遊びである事が、甚く彼等の心を暗くさせるのであつた。

三

その遊戯の陰鬱であつたにも係らず、蓮華麻呂の身體は日増しに成熟した。

蓮華麻呂も數へ年五つになつた。筆持つさへもいたいけに字を書いた。時としては父が繙く古文書の中を、鳩のやうな瞳て何時までも〳〵矚めてゐる事もあつた。

その年の眞夏であつた。ふと頭腦が重くなつて光重は床に就くやうになつた。始めは唯だ暑さにめげたのだとのみ思つて、左程氣に留めてゐなかつた妻も、折々譫言さへ漏らすやうになつてからは、今更の如く心忙しく案じられて來た。不慮の不安が家の周圍を取巻いたと云ふ事は、幼な心の蓮華麻呂にも通じたやうに思はれた。

黃昏の色がひし〳〵と富士川から差迫つて來る夕方であつた。心臟を剜るやうな蜩の聲が礑と歇むと、空は急にどす黝く曇つて足早の雲が往來し出した。山々の深綠も黑くなつて遽かに蒸し〳〵して來た。

日がとつぷりと暮れて、彼方の丘や此方の谷からちらりほらり燈火が仄見え

る頃になつて、光重の病勢は急に革まつた。村の人々は我勝ちに馳せ集つた。

村の長としてよりは精神的に親として、彼等は彼の危篤を思ひ煩つた。氣强いが、併し慈愛に豐かな光重は彼自身に求むるに先立つて他……村の人々のために求めた。自分の傷づく事でも、それが人々を益する事であるならば、軈ては傷づく以上の効果を收めて癒えると云ふ確信に生きてゐた。て、彼は何時も考へてゐた、苦痛や悲哀は、あるものから脫れやうとする自業自得の苦患て、丁度繩を蛇と見た誤謬から怖ぢ恐れるやうなもので、その呪ひ恐るゝ人それ自身の迷妄だと。彼の生命は不斷の現在であると共に、現實の底深く熱を持つて流れてゐた。これがために、村に何事かゝ持上つた場合には、彼自身平和の神として其處へ臨んだ。殊に蓮華麻呂が生れてからは、彼の溫情は一層濃やかになつた。『村の者共の爲め……』何事を謀るにしても、この言葉なしに彼が口を開いた事は曾つてなかつた。この情緒こそ純朴な人々の心の扉を開く秘鑰てあ

つた。

人々は交る〳〵病室を見舞つた。開放した部屋は仄暗い油火が搖ぐ。緩く垂籠めてゐる蚊幮の中に夢のやうに光重が横つてゐる。ぼんやりと輪廓だけ浮いたその顏は、夜目にも四五日の病ひとは思へない程げつそりして見えた。彼等は言葉もなく凝乎と蚊幮の中を瞶めた。不慮の禍の成行きを靜かに讀むかのやうに、妻は夫の額を濡れた布片で冷してゐる。その脇に蓮華麻呂はすや〳〵と眠つてゐた。

薰は問はれる儘に一々丁寧に應答をした。發病已來の經過も一通り談した。日盛りに庭の草を拗つてゐて突然倒れたきり、水の外何物も咽喉を通さない事から、村に關係した事や子供の養育に就ての譫言を言つた事などを心細く物語つた。その間にも病人は時々形で水を要求した。

何時か外は雨になつた。風さへ交つて飛沫を吹付けるので雨戸を締めた。急

に室内の空氣が澱んで蒸れると、病人の肌が汗發んで來た。布片から滴る雫が耳から枕の上へさら〳〵と零れる。妻は手拭で病體に觸らぬやうにして徐と拭いた。また滴りさうだから拭かうとすると、這度は顏にも燦々と滴る。はつと思つて手を伸べると、その光つたものは布片から流出た冷たい水ではなくて、堅く閉ぢた眼から溢出た熱い〳〵涙の雫であつた。妻は湧出る涙を噛んで自分を支へてゐた。

『佛壇を片付けて……』

突如、微か乍ら病人は口走つた。

人々は一齊に聲を嚥んだ。

暫らくして人々は一夜を明かすために次の間へ下つた。

雨戸を敲く雨の音、物凄い立木の唸り……それ等は何事かを暗示してゐるやうに思はれた。彼等は蚊遣りを燻らし乍ら細々と談合つた。總ての同情は薰の

上に濺がれた。子供の未來に光明は認めたにしても、纖細い女の手一つて看守つて行くと云ふ事が、如何にも賴み少ない事のやうに考へられた。

死に對する明瞭な意識を持たない彼等の心にも、悲しい追懷は、繭玉から繰出す絲のやうに盡きなかつた。追憶は更に聯想を生み、聯想は更に緻密な聯想を生んだ。而して鈍い裡にも涙を持つ彼等の眼は、限りない憂愁と沈思の薄幕に掩はれて了つた。

不安な夜は明けた。

夜來の暴風雨は晴れたけれども、光重は、溫かい妻の看護の下に夜明方になつて息を引取つた。薰は左程に思はなかつた。然共、心あつてか、線香を立てて掌を合す我兒の姿を見ると、顫えつくやうに悲しくなつて聲を揚げて泣き潰れた。

四

小ひさい村は急に忙しくなつた。人々の走る影が彼方にも此方にも見られた。光重の家では種々な準備に大勢の人が立働いてゐた。大根を切つたり牛蒡を削つたりしてゐた。大きな鍋から湯氣が白く立つた。

薰は、眼を閉つて半ば笑つたやうな夫の顏を白布で掩ふて、死骸の側に坐つた。而して手向けられた赤い花に線香の烟が縺れて行くのを黯然として見た。まだ落付いて夫の死を考へる暇もなかつた。それでも、それが無邪氣な何も知らない幼いものゝ上に、不安な影を投げた事だけは死の刹那にさへも明瞭と意識した。

短い、併し平和な光重の生涯を想起させるやうな夜であつた。薰は綠の黒髮を根元からふつゝり切つて棺の中へ斂めた。やがて棺と赤い花とを前にして村

の年取つた人達が集つた。不意に襲ふて來た恐しい病氣の話を、繰返し〳〵人に談して聞かせる蕭の聲は、悲しい調子が籠つてゐた。人々はさも驚いたやうに頷き乍ら時々眼を拭つた。

山里の夏の夜は早くも更けて周圍は闃とした。時々思出したやうに蛙の鳴く聲がした。涼しい夜風が絶えず這入つて來て、多い蚊も左程氣にならなかつた。老人達は鉦を敲き乍ら御詠歌を唄つた。

夜中過ぎになると摶飯や茶が出た。一仕切慈け深かゝつた亡き人の事が繰返されたが、それが濟むと、又た唄ひ始めた。身も心も引入れられさうな、柔かな悲しい調子て、鉦の音に連れて繰返し〳〵唄はれた。その滅入る樣な哀調に、蕭は夢かとばかり惑つた。『夢ならば疾く醒めよ、現ならば鉦の音と諸共消えも失せんものを』と心は黒く沈んだ。住み馴れた我家をとことはに旅立つ最愛の夫は、唯だ今宵一夜の名殘かと思へば、身も世もあられぬ哀しさを包む袖にも

涙は餘つた。その間にも絶えずいぢらしい蓮華麻呂は、居眠りもしないで線香を立てた。

沈んだ鉦の音に連れて遣瀬ない御詠歌の聲が終夜聞えた。亡き人の知合であつた若い住持も葬ひの式に列つた。燒香をし乍ら思出に堪えないもののやうに眼を瞬いた。

式が終ると、若い人達は我勝ちに棺を擔いだ。蓮華麻呂は位牌を兩手で抱き乍ら、母に助けられて行き馴れた墓道を歩いた。紫立つた大きい森林の中の暗い淋しい道は、古い落葉が積つてじめ〳〵してゐた。黒い汚い水の溜つてゐる所もあつた。その水の底には森の黒い茂みが映つてゐた。軈て雜草や灌木の生ひ茂つた丘へ出ると、若い人達は聲懸けをし乍ら棺を下した。

其處には新しく掘上げられた土塊が堆高く盛つてあつた。棺は四隅へ二重に荒繩が括り付けられて、徐に穴の中へ吊下げられた。到頭棺は地の底深く見え

なくなつて、荒繩も一緒にして投込まれた。薫は、我子に一塊の土を投込ませて、自分も投げて合掌した。

何時の間にか西の空は眞赤な血を塗つたやうになつて、足下からは早くも薄闇の色が差迫つて來てゐた。突然、ばた〳〵と黒い羽を敲き乍らがあ〳〵と、幾十羽かの烏が氣味惡く啼きたてゝ森の方へ飛んだ。

その晩、遲くまで若い住持は長い御經を讀んだ後で、世の中には因果と云ふ無智な人間には思ひも付かない法則が祕んでゐるのだと、薫に談した。死ぬと云ふ事は、長い夢のやうなもので、其麼に悲しむべきものでもなければ、又た偶然に襲ふて來るものでもないと言つた。餘りに泣いたり悲しんだりするのは、却つて亡き人のために不親切な事だとも附け足した。

勝手元で働いてゐた人達も一人減り二人減りして、やがて住持も種々慰めの言葉を殘して歸つた。

蠟燭の火が絶えずちら〳〵と夜風に動いた。蟜蟥などが時々火を取りに來た。線香を立てたり鉦を敲いたりしてゐた蓮華麻呂も、何時か母の膝を枕に眠入つた。

夜が更けて四邊が靜まるに連れて、薫は曾つてない淋しみを感じた。ちいちいと何處かで蟋蟀が啼いた。すると、彼方でも此方でもちい〳〵啼出した。その細い乍ら鋭利な聲を聞いてゐると、腦の心を尖つた針でゞも刺されるやうな氣がした。薫の心は次第々々に沈んで來て、思出すともなく夫の死際の光景が浮んだ。――血の氣の薄らいだ脣を動かして頻りに渴きを訴へた。『水を』と蓮華麻呂が差出した茶碗を、獨りで飮まうとして取落したので子供が泣出した。それとなく觸つて見た指尖は、冷たく、爪も紫色に變つてゐた。變る事も變つてゐたけれども、あれで死ぬとは什麼しても思はれなかつた。今現に斯うして位牌の前にゐて見れば、疑はれない事實であるのに、それが何だか夢でゞもあ

るかのやうに、死んだと云ふ事が不思議でならない。これまでに死と云ふものを幾度か聞きもし見もしたが、昨日や今日の間に、夫がその死に捕はれたとは何う考へても思へない。唯だ物足りない、寂しい、落着かない。死は什麼して彼麼(あんな)不明瞭な姿で來て、而もこの恐しい寂寥(さびしさ)を殘して行くのであらう！

薫は床へ這入つてからも、未だ息も切れない夫を棺に入れて、あの深い穴の中へ埋めて了つたやうな氣がしてならなかつた。然共、幾等夫の死は疑つても、骨身に喰ひ込む寂寥は拒む事が出來なかつた。『我死すとも、希望に輝くこの子だにあらば』と言つた夫の言葉を思合せると、夫は既に死の事實を知つてゐたのであらう。或は子供のために自分の生命を抛つたのかも知れない。

死ぬ迄に思つた我子の行末に慰藉のないではないが、何を夢見てかすや〳〵と眠つてゐる我子の顏を見ては、泣くまい〳〵と思ひ乍らも、つい淚に誘はれるのであつた。

五

悲嘆の裡に七日も過ぎ四十九日も濟ました。百ヶ日が經つと、かねて夫の遺言ではあり、それに兄から度々の使ひもあつたので、住み易かつた鰍澤の鄕を後に、駿州河合へ移住する事になつた。

いよ〳〵この里から別れると云ふ事は、薫の身に取つては容易ならない苦痛てあつた。紀念すべき我子の誕生地として、殊に我が最愛の夫が終焉の土地として、輕々しく足を後に向けるに忍びなかつた。然共、夫の言葉を思ひ、惠み深い兄の心根を考へては動かない譯にも行かなかつた。

出發の朝になつて薫は蓮華麻呂を連れて墓へ行つた。犯し難い棲神の靈地を發(あば)く罪のたゞならぬ事は知つてゐたけれども、道の程遠い聽て移り住む河合から、度々此地へ足を運ぶ事の女の身として思ひも寄らぬ困難であるので、一時

犯した罪よりは忘るゝともなく遠ざかる罪の重いのを感じた薫は、恐る〳〵墓碑の傍を發いた。蓮華麻呂は泣いて母の手に縋つた。

僅かばかりの靈土を道行く唯一の力と頼んで、馴れない旅に身を任ねた。

斷つても〳〵村の人々は後から追いて來た。

名殘を惜むために振顧つた眼には、止途もなく湧出る涙に霞んで見えなかつた。

谷から山、山から村へと、幾日かの後、薫は懷しい故鄕の姿を見た。山を下つて行くにつれて谷はだん〳〵開けて、田子の浦は青く光つて見えた。

善清はほく〳〵して迎へた。

翌日薫は兄と一緒に、亡き夫の紀念を葬むるために、蓮華麻呂を連れて菩提所である岩本の實相寺へ詣つた。

遠見では黑黝んだ小山とも見える松並木に挾まれた山門を潜つて、奥へ〳〵

と辿つて行くと、紫立つた險しい山を背後に矗然と聳えた本堂がある。針葉蓊々として晝なほ暗い林の彼方此方には種々な建物がある。一段高い岩窟のやうな所に經藏らしいものもあつた。寺らしい寺を見た事のない蓮華麻呂は、總ての建物の前で合掌して喜んだ。

善清は墓地へ行つてから、寺に就いてのいろ〳〵な事を薫に談して聞せた。寺は天台宗で横川の末寺では牛耳を握つてゐる事や、後鳥羽院の勅願所であると共に平家調伏の道場である事や、それから毎朝四十九院の大衆が本堂へ集つて天下泰平を祈禱するのだと談した。

薫は早い日の記憶を喚起して、その頃はたゞ冷談に聞き流してゐた事を恥ぢた。

歸りに別當である嚴慶律師に親しく會つた。

眼識の高い律師は、一目見るなり蓮華麻呂の非凡な子である事を見取つて、

頻りに弟子にするやうにと懇望した。蓮華麻呂は幼な心にも、厚い情と犯し難い力の籠つた律師が懐はしいやうな氣がした。蓋は唯だ『霎時の猶豫を』と言つた。善清は心竊かに嬉しくは思つたが『改めて』とのみで別れた。別れに臨んでも、律師はその言葉の虚しくならないやうにと願つた。

一度實相寺へ足を踏入れてからの蓮華麻呂は、その遊び方まですつかり變つた。物靜かな陰に隱れて、土を捏ねて佛像の形を作つたり、でなければ佛壇の前へ坐つて讀經の眞似をするのを無上の樂しみにしてゐた。その殊勝なしをらしい姿は、家内のものゝ總てを汚れから遠ざかるやうにさせた。殊に亡き父の精靈を慰むるために、毎朝のやうに、その時折りの花草を摘んで來て佛前に獻げるのを見ては、如何にも泣かずに居れなかつた。

夏が來たり秋が來たりした。山々の雜木林が黄くなつて、やがて恐ろしい凩が木の葉を振ひ落して、海のやうな唸りを聞く冬も遣つて來た。その間に幾度

か懇篤な使者が律師から來た。

蓮華麻呂は何處となく可愛氣のある怜悧しい子になつた。髮の毛も濃くて、顔の色も澤々してゐた。

父のない子であると云ふ不憫の情と、並ならない性情に對する期待の念とは、絶えず善清の胸に燃えて、疎かならず思つて育てた。折りに觸れてはいろ〱と教へもした。その鋭い記憶と推理の力とは、思ひも付かぬ所で時々見出された。

それはある秋の澄み切つた夜であつた。青く冴えた空には彼方にも此方にも輝く星の光りが瞬いてゐた。その星の閃きを瞻仰げて蓮華麻呂は小ひさい心を躍らせた。淡く濕つぽく微かに遠くて光つてゐるのもあれば、強く冴え切つて燃えてゐるやうな星もある……この自然の不可思議な造化に、震へる可憐な心は全く奪はれて了つた。然共、驚異の念に驅られたのはほんの霎時てあつた。

やがて彼は、星の何物であるかを叔父に訊かずには居れなかつた。善清は直ちにそれは神や佛であると敎へた。すると彼は更に、何故に明るい晝間に神佛の姿を認める事が出來ないで、却つて暗い夜間にそれ等を見出し得るのかを問ふた。善清は餘りの深刻な詰問に、直ぐには示す言葉も見當らなかつた。

その明くる年建長五年、丁度蓮華麻呂が八歳の四月であつた。考へに考へた揚句、善清はいよ〳〵蓮華麻呂を岩本實相寺へ入門させる事にした。薫は目出度い我子の門出を壽ぐべくいそ〳〵と立働いてはゐるものゝ、遉がに恩愛の絆を斷つ痛さは胸に包み切れなかつた。

六

嚴慶律師の喜びは一通りではなかつた。雪のやうに白い眉根を開いて、つく〴〵と蓮華麻呂の顏を瞻め乍ら、子供の馴染むやうな事を談しかけたりした。

蓮華麻呂は暫くの間にすつかり馴れて、宛で長年住み慣れた家にでもゐるやうに、怖ぢけた色も見せないで、可愛い手眞似などして邪のない話を面白がつてした。

庭には幾本かの古い櫻が咲き零れてゐた。時を忘れた鶯の聲も時々谷間を渡つて聞えた。幽邃閑雅なこの仙境に半ば心を奪はれ乍ら善清は、仙骨犯し難い律師と蓮華麻呂を後に寺を出た。『名殘惜しや叔父上！』と懷き付きもしないで蓮華麻呂は、玄關まで送出すと元氣よく奥の間へ這入つた。律師は、小ひさい心の底に湧く發心の泉の汚れないのを、涙に流して喜んだ。

その日も暮れて常に變らぬ朝日は上つた。未だ黑白も分ち得ぬ黎明から、山は大衆の讀經の聲で鳴り響いた。誰起さないのに蓮華麻呂は、その微妙な法音に聞蕩れてゐた。長い勤行が終ると、大衆は各自に自坊へ歸つて行つた。軈て夜はほの〴〵と明け離れて、勇ましい鷄の聲は朝靄の中を潛つて聞えるのであ

つた。

暫らくすると、大衆は再び大書院に集つて來た。中央正面には萬卷の經釋の中に埋れ乍ら、大衆を前に千古の祕法を傳へるために、律師は靜かに坐つてゐる。之を挾んで一山の學徒は二列に流れてゐる。

大衆の間には法悅の色と叫びが漂ふ。遙かに列から離れて蓮華麻呂は、この薰やかな法香にうつとりした。

恁うして日毎に、清淨な法筵は敷かれるのであつた。

講演が了つてからの律師は、何時も、膝近く蓮華麻呂を呼んで何くれと敎へるのであつた。その年頃に相應しからぬ理解力を持つた蓮華麻呂は、律師の心をいよ〳〵強くさせた。數多い弟子の中でも、蓮華麻呂こそ自分が蘊蓄してゐる總てを傾くべき法器であるとの念は、日增しに高まつて行つた。て、他を粗略にすると云ふ譯ではないが、兎角水の低くきに就くやうに、『蓮華麻呂は？』

と氣遣ふ心持は到る所へ追いて廻つた。殊に老いての子の愛しさの別であると同樣に、律師に取つて彼は最後の佛子であつた。それが並ならぬ神童であつて見れば、平等海に漣の起らないとも限らなかつた。これがためには、並居る弟子達の間にあつて、世の兒童のやうにいとしがらるゝ代りに、却つて妬みを蒙るやうなことも屢々あつた。然共、嫉しと思ふ間にも、彼の唯ならぬ奇才を稱へるのを禁じ得なかつた。分けて彼等の心の奧底に冷たい感じを與へた事は、蓮華麻呂が雨の日も風の日も父の墓參を忘れないことであつた。

誰敎へないこの健げな心根は、唯だ血の繋りにのみ捧げはしなかつた。朝と夕との隔てなく律師の起居を氣遣つて、公務の外はその身邊から遠ざかるやうな事はなかつた。

何時しか見渡す限り黃金色の秋となり、凩荒ぶ冬も過ぎて、再び彌生の長閑な春の日が遣つて來た。蓮華麻呂の學事はいよ〳〵進んだ。

その初夏の好もしい日をトして、蓮華麻呂は眞の佛子となるために、薙髪の式を擧げる事になつた。斷えて久しかつた善清は、薰にも劣らず蓮華麻呂の安否を尋ねやうとは思つたが、あたら心を澄す子供の戒行を亂すやうな事があつてはと、その日の來るのを待ち焦れてゐた。

大乘の中に交る蓮華麻呂の姿を一目見ると、薰は衝上げて來る涙を抑え切れないて、その儀式臺に泣き潰れた。善清は千載一遇のこの嚴かな祝日を瀆させまいと、薰の肩を押へて勦つた。

華やかに而も深床しく飾られた本堂の中壇には、金色の光明が心靜かに呼吸をしてゐる。周圍に相應しい大きな青磁の香爐から立上る香の煙は、消え易い人の命に思ひ比べよとてか、斷えると見せては又た立上る、軈ては又淡く溶けて行く。靜謐は永へに寂寥の中へ死んで行く……空虛な靜けさの裡に、幽冥界からする喚きのやうに、峻嚴な鐘は堂內に鳴り初めた。一山の大乘は律師の後から陸續と坐席に列つた。崇邈な讀經の聲は低い旋律を持つて堂外に流れた。

何時か堂內は近鄕の人々て埋められてゐた。善清と薰とは最も須彌壇に近い側面に坐つてゐた。

徐に內陣に導かれた蓮華麻呂は佛前に跪いた。小ひさい黑衣の襞は折目豐かに後へ流れた。慈愛に輝く律師の瞳はいつか薄霞が立ち罩めた。氷と閃く一片の剪は、觀念の眼を閉ぢた律師の手尖に顫えた。

やがて翠滴る黑髮は、永へに蓮華麻呂の頭から別れを告げた。薰は黯然として眼を塞いだ。讀誦の聲は稍々悲調を帶びて來た。燈明の光りのみは常夜の闇を照すべく些の搖ぎさへ見せなかつた。

この日から蓮華麻呂は甲斐公と呼ばれるやうになつた。

薰は子供の行末を見濟したので、再び鰍澤へ歸つた。

身心今や清淨となつた甲斐公の精進は日を追ひ月を追ふて色深くなつた。盡

きるとしもない律師が敎示も、既にその了りを告げやうとした。曾つては妬みもし罵りもした學徒は、最早呪ひの言葉を持たなかつた。靡くともなく彼の膝に集つた。

自らのために榮えある前途を誤らせるやうな事があつてはと、律師は六十餘州に名をなす山、千古不斷の法窟三井寺へ登さうとして、それとなく甲斐公の心を探つて見た。

七

『既に我が祕鑰も公がために讓れり。今や天下にその師を需むるの時は到れり。三井の法窟を敲くの意なきや。』

研鑽に日も短い甲斐公に取つては、慈愛を含んだこの言葉は、渴ける人の泉の呵ぎを聞く感じてあつた。名のみ聞いたゐた三井寺！それが天台荆溪の流れを汲む靈山と聞いては、即坐にも立たうとした。

身心を擧げて佛に捧げたとは云へ、僅かに十一の少童が、幾十百里の山川を蹂躪りて西の空を戀ひ慕ふ健氣さは、四十九院の大衆に取つては寧ろ一場の物笑ひにしか價しなかつた。けれども燃え立つ胸の餘は、小ひさい心臟の血を沸かして歇まなかつた。

ありとも知れぬ微風に木々の梢を見捨てる落葉に、秋の悲哀を語る十月の中ばてあつた。住み馴れた岩本の山を後に、見も知らぬ他鄕の雲に思ひを寄せ乍ら、甲斐公は旅に出た。然共、道がに心は亂れた。一歩々々と遠ざかつて行く富士川のさゞめきは、自分を呼返す人の聲かとも惑つた。心强くは見せても、詐る事の出來ない老いの身の律師を思ふては、替へる足も兎角鈍り勝ちてあつた。

落葉折敷く山から谷へ、谷から里へ下つては上り上つては下つた。誰を賴み

にするともなく、唯だ法の寶の山とのみ憧憬れて、か細い足に身を任せ乍ら寂しい影を西へ〳〵と投げては歩いた。ほろゝ寒い秋風に惱む薄の蔭に暮れて行く西の空を瞻仰げて、心静かに足の疲れを忘れる事もあつた。舞ふともなく散つて行く雲のいざよふのを見ては、自然の偉大な力を恐れもした。かねて教へられた『佛!』は、過ぎ行く雲の中にも震える薄の中にも隱れてゐて、自分の些細な行爲までも看脱さないでゐるのではなからうか、散り行く木葉の音にも云ひ知らぬ暗示があるやうにも思はれた。

かくて毎日、霜の黎明から沈み行く鐘の音に短い一日の終りを告げる頃まで歩いた。

長い旅路の終りは、石山の彼方へ甲斐公を運んで行つた。

黒味を帶びた琵琶湖は眼前に展けた。静かに眠つてゐる水から、鹿子斑の四明ケ岳が突出てゐた。その麓には、一際目立つて赤く燃えてゐる丘がある。そ

れが三井寺であることはそれとなく知れた。

時の刻まれた宏壯な建築、周圍の樹立、先づ彼は心を魅せられて了つた。都近い一山の學徒の姿から言葉付、殊にその人々の秀てた學才のほのめきに小ひさい胸は躍つた。

土地に眤み人に馴れるにつれて、學事は目に見えて捗つた。時としては推高く積んだ古文書の中に、或は學徒の群に交つて、日の經つのも覺えなかつた。凡ての國々から集つた龍象義虎の間に、夜を日に繼いで習ひ究めた。

その間に程遠くもない比叡から毎日のやうに法戰を挑んで來た。これと對陣する事に依つて堂内は、活氣と法味の薫りが溢れてゐた。勇み立つ幾百の學徒の瞳は、各自の心の刃の切味を試みるべく燃えた。生死を外に眞理の光りに憧憬れてゐる彼等には、此處は不斷の春の花園とも見えたてあらう。

初は唯だ、亡き父の菩提のため、寂寥を喞つ母の行末を思ひ、老いにす枯れ

行く律師の恩惠に感じて、志を立てた甲斐公は、日を追ひ月を重ぬるに連れて、理想の影をいよ〳〵高く廣く進めて行つた。自己に親しむ念が薄らいで、『彼も人我も人』との平等の觀念は、力強い妙理の光りに照されて、止觀を凝らす朝夕に、實相の姿をあり〳〵と會得して思はず微笑まるゝ事もあつた。けれども盡きせぬ泉を汲むやうに、蹈み入る法の道は涯しのあらうとも思はれなかつた。とは云へ、釋尊の成道を思ひ、天台の頓悟を想ふては、眠る暇さへ惜まれた。

この止暇斷眠の熱烈な研究を見た學徒は、讃辭を送ると共に、心なくもその身を損ふやうな事があつてはと誡めもした。時に我及び衆僧倶に靈鷲山に出づ。』との金言を信じ切つてゐた彼に取つては、五蘊假和合の身體は塵埃にも等しかつた。唯だ常住の佛界こそ、彼が日夜に忘れる事の出來ない身體であり心であつた。――縱令その佛界をこれと明瞭に意識する事は出來ないにしても、我が心を斯くまでに緊張め、斯くまで慰藉を與へて呉れる佛を認めずには居られない。無なるものであるならば、何故に有なる我が心を動かす力があるであらう。無が有を生ずるの理は什麽しても考へ得られない。而も我が心の如何にも快く平和な氣分に誘はれるのは、決して拒む事は出來ない。して見れば有を作出す所のものは仍且有てなければならない。迷霧に鎖されてゐると云はれても、現實の慰安を否定する譯には行かない……佛を見出すまではと、彼は自己の心に問ひ自己の心に答へて幾年月を過ごした。

束の間と思つてゐた間に、時はずん〳〵流れて行つた。何時か甲斐公も十三の春を迎へた。長閑な彌生の空に囀る鳥の聲は、何時も乍らに朗かである。咲き競ふ庭の櫻花も色鮮やかに周圍を彩つた。然共、獨り甲斐公の身には思ひ掛けない不安の雲が降り懸つた。懷しい母國からはる〴〵齎らした飛報は、悼ましくも慈母の死を知らせて來た。眞如の月に心は澄してゐたものゝ、遉がに色

を動かさずには居られなかつた。とは云へ、寄る島もない他鄕に、獨り心の惱みを胸深く祕めて置くより外に術もなかつた。

行手に光りを認め乍ら、橫道へ外れる恨みはないではなかつたが、疎かならぬ母の臨終を思ふては、手を拱く暇もなく旅路に上つた。再び來るべき日も契り難いこの土地、心の眼を開くべく敎へられたこの法窟！去り難きを去らねばならぬ不運！これも沈み易い世の常とは知りつゝも、淚の滲むのを禁じ得なかつた。

名殘を惜む言葉も包んで、三年前の追憶に思ひを寄せ乍ら琵琶湖の水に影を寫した。

八

運ぶ一歩々々は力なく、見送る山も川も唯だ心を潤す種となるばかりであつ

た。一度出家となつたからには、早くも一世の契りは斷れたものと斷念めつゝも、三年前に別れた母の俤が振拂ふ後から閃いて來る。別れを惜んで何處までもと追ひ縋つたのも、今の恨をそれと知らせるためであつたかと、心が亂れる。心のみ焦つて足の疲れも氣に付かない。急ぐ旅路は兎角日が短かくて明け行く朝日の影を見るのも待ち遠しかつた。いよ〳〵母國の空を仰いだ時、都を後に幾十日を過ごしたのかそれさへ覺えなかつた。

早い日の印象を細々と刻んだ生家に着いた時分は、身心綿の如く疲れて、母の死を偲ぶ力さへなかつた。

漸と氣付いて家の中を見廻しても、幻に殘る姿がちらつくばかりて、現の母の面影は永刧に冷たい土に埋められてゐた。

待ち焦れてゐた善淸は、悲しいのか嬉しいのかそれさへ分らなかつた。

見違へる程成人した彼を見て、村の人々は『母君が存生にておらば……』と、口には出さないが彼等の思遣り深い心の嘅きはあつた。彼等は暫らく都の物珍らしい談に聞き蕩れてゐたが、軈て彼の不在中に起つた正嘉已來の悲慘を極めた天變地妖を交る〲物語つた。

――地軸を覆へす勁烈(きやうれつ)な地震が歇むかと思ふと、忽ちに津々浦々では山嶽の如き怒濤が襲ひ懸つて來る。而も一日として安靜な時とてはない。晝は日蝕のために黯澹たる龍雲が迸り飛び、夜は不安を暗示する月蝕があつて、草木を嚇(おど)かす颶風が荒れ狂ふ。時には山が壞れ地が裂けて、その割目からは恐しい紫色の火焔を吐く。さては天空遙かに閃く紫金の電は、闇を破つて殺倒して來る雷鳴と共に、戸も障子も襖も搖り倒して、遂に家をも崩して了ふ。恐怖の眼を闇の中へ投げると、开處には險惡な彗星が異樣な光芒を放つて見下す。惡戯(いたづら)な狂星は西から東に北から南へと飛ぶ。

殊に去年の夏から流行して來た疫癘(やくびやう)に引續いて、大旱魃のために草も木も皆枯死して、田にも畑にも青色を失つて、人の顔のみが蒼白く萎びて來た。偶々途を歩くと、周圍にある樹皮は剝ぎ取られ、草の根は掘盡されて餓莩(ゆきだふれ)は彼方此方に唸つてゐる。その呻きを辿つて肉に饑えた猛獸が彷徨ふ。かくして食ふべき穀蔬もなく餓死したものが、小ひさい鰍澤の村だけでも二十幾人あつたと物語つた。

甲斐公は聞くもの毎に驚いた。たゞ佛道にのみその身を窶(やつ)して、母國の空に斯うした慘劇のあつたのを知らずに過ごした事を、心から遺憾に思つた。

而かも、加賀法印や鶴ヶ岡の別當良辨が血を吐いて祈つたが何の驗(しるし)もなかつた事を聞いて、彼はこの變災の原因が何處にあるのか惑つた。

ふと彼の胸に浮んだのは大集經の文であつた。

『佛法實に隱沒せば諸法も亦た忘失せん。當時(そのとき)虚空の中に大なる聲ありて地に

震ひ、一切皆な遍く動せん事猶ほ水上輪の如くならん。城壁破れ落ち下り屋字悉く圮れ坼け、樹林根莖枝葉華葉菓藥盡きん。諸ゆる井泉池一切盡く枯涸し、土地悉く鹹鹵し敵裂して丘澗と成り、諸山皆燋燃して天龍雨を降さず。苗稼皆な枯死し生者皆死し盡して餘草更に生ぜず。皆な昏闇にして日月明を現ぜず。四方皆な亢旱し數々諸の惡瑞を現じ、衆生の父母を觀る事猶ほ獐鹿の如くならん。』

それにしても日本六十餘州島二つ、殘る隈もなく行き渡つた寺院堂塔の甍を並べてゐる今日、佛法が滅盡したとは如何にも考へられない。それにその堂塔伽藍にはそれぞれ碩學名匠が居て、法筵を敷いてゐる筈である。經文が果して千古不磨の金言であるならば、その名匠知識と謳ばれてゐる人々は世を呪ふ傀儡師であつて、華やかに飾られた堂塔伽藍も人を惑はす機巧に過ぎない。而して最早この國には眞の佛法は根絶して、正義に與する導師は枯死したのであらう

か。としても、『閻浮提の內廣く流布せしめて斷絕せざらしむと。』法華經にあるからには、何時かこの經文の光りの輝く時が來なければならない。誰人かの手に依つてその光りは一層鮮やかに、一層の潤ひを以て人々に灑がれなければならないとの期待の念は、新たに彼の胸の中に頭を擡げて來た。

翌日彼は墓へ參ゐるために家を出た。

心忙しく夜道を歸つて來る時には、少しも氣付かなかつた周圍の變遷に、彼は全く異鄉でも彷徨ふてゐるやうな氣がした。已前には田であつたと記憶してゐる所も、今は砂丘のやうに荒れてゐる。生ひ茂つてゐた森も、痕跡もなく枯れ果てゝ、彼方にも此方にも家屋が潰えてゐる。何物に啖ひ散らされた骨か、腐肉が黑くこびり付いて橫たはつてゐる。

過去の記憶に問ひ、現在の餘りに懸隔てた光景を見て、彼は夢かと惑ふた。臺石の半ば埋つた亡き父の墓に並べて葬られた母の墓の邊りには、新しい土

の香が漲つてゐた。凝乎と瞑目してゐると、父の死骸を埋めた時の光景がありありと浮んだ。白木の棺が穴の底深く吊下げられた時、泣き脹らした眼を蔽ひ乍ら、母は恐る〳〵覗いて見た。その母も今はこの冷たい土の中に眠つてゐるのだと思ふと、云ひ知らぬ無情に心が曇つた。

九

善清が歸へるのと一緒に、甲斐公は岩本へ行つた。

嚴慶律師は今日か明日かと待ち厭倦てゐた所であつた。

見違へる程に身體の發育した事は別としても、その思想の濃厚になつた事は何よりも、律師の心を嬉ばせた。律師は種々と彼のために歡喜の言葉を盡した後て、この正月頃から、一代藏經を閲するために日蓮上人が來てゐられる事を談した。上人の風丰から擧止、殊に高潔な德と廣遠な學識とは、彼のためにこ

の上もない師範てある事を告げた。これを聞いた彼は直ちに上人の居室に身を運んだ。

彼は靜かに自分の切なる願を語つた。

血色のいゝ唇に微かな笑みを湛へ乍ら『佛道に勵まれよ。』と上人は口を噤まれた。

經机の上の些やかな青磁の香爐からはのどかに煙が立ち昇つてゐた。

彼は上人の愛に燃える眼光に觸れた時、電のやうなある閃きが胸の中を過ぎた。廢頽し切つた佛法も上人の手に依つて復活されるやうな氣がした。と、襖の傍で甲斐々々しく立働いてゐる年若い沙彌がゐるのに氣付いた。彼を見ると沙彌は慇懃な挨拶をして、筑後房と呼ばれてゐる事を話した。

若い同志は談がよくあつた。談をしてゐる間にも彼は、その沙彌が濃やかな情緒に溢れてゐることを知つた。彼はつく〴〵思つた、良將の下に弱卒なき例に

漏れないて、上人のやうな偉人であればこそこの温讓滴る弟子があるのだと。

その夜彼は學頭の智海法印に會つた。

法印は初は上人を單に怪僧としてのみ見てゐたが、日を經るに從つて、その嚴肅な態度と宏博な學識とに魅せられて、時々止觀の講演を聞いたりした。その度毎に氷の解けるやうにだん／＼上人に心は傾いて行つたが、振顧つて見れば學頭の身であるので、直ちに上人の膝下に跪く譯にも行かなかつた。で偶々歸つて來た彼と物語つてゐる間に、如何にも末賴母しい彼を身代りに、上人の給仕として側近く置かうと思つた。

彼は願つてもない事と喜んだ。

上人が經卷を繙く傍ら講じられる法門は、如何にも深味のある切實な所があつた。四十九院の大衆は、熱烈な信念と滑らかな辯に、すつかり心を奪はれて了つた。然共、同じ天台宗から出た上人が、什麼して斯うまで深刻な敎義と痛

切な信仰を得られたであらうかと、可愛がつてゐた小鳥に逃げられてもしたやうな、如何にも齒痒いやうな感じがしないでもなかつた。

兎角に現實を振切つて、理想の陰に隱れ易い天台の理鏡に影は投げたとは云へ、心は絶えず醜き現實の上に据えて、永劫不變の實相を現實その儘に融合させやうとの努力の上に立つた上人は、天台の緇素を前にして、懼れる色もなく獅子吼された。天台傳敎の往昔はともかく、慈覺智證の兩大師からの天台宗は、權と實との黑白を識別しない盲目宗となつた事を痛罵された。聽衆は固唾を嚥み乍らも、その鋭い舌と根強い論鋒に指さへさす事が出來なかつた。

恁うした間に彼が上人を追慕する念は極度に達した。殊に筑後房が至盡の友情は彼の心を包容して、霎時でも一緒に居ないと、何となく物淋しく感ずるやうにさへなつた。

時として筑後房は鎌倉にゐる兄弟子の日昭の談などをした後て、頻りに彼が

上人の弟子となるのを勸めた。彼も優しい友の談を聞くにつけて、日昭に邂逅(めぐりあ)ふやうな月日の廻つて來るのを心に願つた。

互に心の解合つた二人は、上人の左右の影のやうにまめやかに仕事した。上人も何かと不便な土地に居乍らも、慰み多い所があつた。

長い月日も夢の間に經つた。最早讀むべき經典も、漁るべき疏釋も盡きたので、再び鎌倉へ歸つて國家諫曉の準備に上人の心は向いた。

上人に去られた實相寺は遽かに黯雲に立て籠められた。上人のやうな人があつては、宗門は軈て壓迫に壓迫を加へられて遂に滅亡に歸するであらうと、悲憤の涙に暮れるものと、潔く上人の前に身心を投出さうとするものとの間に、火盞が切られた。

彼はこの騷擾を後にして上人を追ふべく岩本を出た。然共、彼の心は暗中を彷徨ふやうな思ひがしないではなかつた。——老いに萎れた律師を振り捨てる

心苦しさと、光りに輝く上人の慕はしさとは、絲の如くに縺れて彼の心の中を駈け廻つた。

一〇

息急き乍ら跡を追ひ懸けた甲斐公は、沼津で上人の一行に追ひ着いた。

『何事の出來(しゆつたい)せしぞ？』

上人は訝しげに振顧へられた。

『餘の儀にも候はず。何卒、某を御弟子の一分に……』

彼は喘ぎつゝ切なる胸の願を訴へた。

『親子は一世の緣、師弟は三世の契り、假初めならぬ契りは、既に律師との間に存せるならずや。縱令其義は合はずとも、それは師弟の仲ならずや。されば、その志は目出度けれども、我が弟子とせん事、律師に對して面目なし。』

『そは誠に御狀の如くには候へども、かねて擧頭よりの勸めもある事なれば、願くば某を……』

『然らば心安かれ。さり乍ら、我が弟子たらんものは、忍辱の鎧に身を堅め、たとひ杖木瓦石の難に遭ふ事ありとも、少しの萎縮もあるべからず。』

『覺悟の上にて候。』

『さらば』と上人は、會心の笑みを漏らし乍ら足を運ばせられた。筑後房は、新たな友情が勃々と沸いて、彼の手を握り占めて喜んだ。

鎌倉に着かれた上人は、松葉ヶ谷の岩窟に蟄居して、心身の熱血を絞つて一個の筆に濺がれた。日は日ねもす夜は夜もすがら、紙に對して餘念もなかつた。

習ひ究めた胸奧の薀蓄と、日增しに募る天下の災禍を救はんとする熱情とは、泉の如く迸り出て綾なす玉編は出來上つた。題して立正安國論と呼ばれた。その一々の文字は、實に上人が國家に對する至忠の血の滴りてあつた。

その間に甲斐公は、筑後房と一緒に日昭から敎を享けた。

軈て甲斐公は、天災地變の理由が解つて來ると同時に、攪亂した世を蒐集し救濟するのは、上人を除いて他にない事が思ひ合された。

それは文應元年七月であつた。

淨寫を了へられた上人は、安國論一卷を携へて、寺社奉行宿屋光則の邸宅へ赴かれた。

光則は深い考へもなく安國論を時賴へ差出した。

唯だ天台の流れを汲むもので、鎌倉の大路小路で辻說法をする怪僧とのみ聞いてゐた時賴は、寧ろ意外な出來事のやうに思つた。然共、上人の心持が時賴の好奇心を唆ると共に、上書をすると云ふのが唯事でないので、徐ろに安國論を開いて見た。

『近年より近日に至るまて、天變地夭飢饉疫癘遍く天下に滿ち、廣く地上に迸

る。牛馬巷に斃れ骸骨路に充てり。死を招くの輩既に大半に超え、之を悲まざるの族敢へて一人もなし。然る間或は利劍即是之文を專らにして西土敎主之名を唱へ、或は衆病悉除之願を恃みて東方如來之經を誦し、或は病即消滅不老不死之詞を仰ぎて法華眞實之妙文を崇め、或は七難即滅七福即生之句を信じて百座百講之儀を調へ、有は秘密眞言之敎に因りて五瓶の水を灑ぎ、有は坐禪入定之儀を全ふして空觀之月を澄し、若くは七鬼神之號を書して千門に押し、若くは五大力之形を圖して萬戸に懸け、若くは天神地祇を拜して四角四境之祭祀を企て、若くは萬民百姓を哀みて國主國宰之德政を行ふ。然りと雖も唯だ肝膽を摧くのみにして、彌々飢疫に逼り乞客眼に溢れ死人眼に滿てり。屍を臥して觀となし尸を並べて橋と作す。觀れば二離璧を合せ五緯珠を連ぬ。三寶世に在し百王未だ窮らざるに此世早く衰へ其法何ぞ廢れたるや。是れ如何なる禍に依り是れ如何なる誤に由るや。』

と、祕術を盡した各宗の禱りも、當局者が腦漿を絞つた劃策も、皆な畫餅に歸したことを一々指摘して、目下の窮狀を救濟するためには法華經の偉力を待つより外にはない、而もその法華經も形式に囚はれた法華經ではなくて、內實を伴つた双美の法華經に依らねばならないとの立脚地を確めて、遂に、

『汝早く信仰の寸心を改めて速かに實乘之一善に歸せよ。然らば三界は皆な佛國なり、佛國それ衰へんや。十方悉く寶土なり、寶土何ぞ壞れんや。國に衰微なく土に破壞なくんば身は是れ安全にして心は是れ禪定ならん。』

と叫んである。

時賴の瞳は異樣に輝いて顏は一面に血走つた。

時賴は極樂寺の良觀を生如來として崇めて、自から最明寺覺了房道崇と號してゐた位であるから、自分の最も崇拜の的である法然を、惡魔であるとか獅子身中の蟲であるなどゝ、喝破されて見れば怒るまいとしても怒らずには居られ

なかつた。
　怒り極度に達した時頼は公場に上人を呼出した。
　將軍宗尊親王を正面に、左右には北條の一門から諸宗の名僧知識がずらりと流れてゐる。
　上人はその眞唯中に坐つて、一々時頼からの詰問を解かれた。その言々句々は肺腑から迸出て少しの澱みもなかつた。十重八重と浴せ掛ける時頼が詰問の箭を、明確な理義の鋒と鋭い信念の及て巧に切り拔けられるので、時頼の足場は刻一刻と亂れて來た。
　遂に時頼は臍を噛んで上人に退場を命じた。
『禪宗と念佛とを失ひ給ふべし。此事御用ひなくば、御一門より事起りて他國に攻められさせ給ふべし！』
　上人は最後の獅子吼を殘して退場された。

後見送つて時頼は、火の如くになつて立上つた。

二

　色さへ變らぬ上人を迎へた法弟達は、袖に縋つて無事を喜んだ。
　草庵へ着かれた上人は、初めて自分が日盛りを通つて來た事に氣付いて、身體の熱してゐるのを感じられた。
　降り灑ぐ太陽の光線に、生ひ茂つた雜草もしゞれてゐる。草いきれは絶えず草庵の中へ流れて來る。裏の山では燒き付くやうに蟬が啼く。
　日昭は、餘りに劇烈な國諫が身命に及ぶやうな事があつてはと、それとなく上人に談した。
　陽炎を追ふてゐた上人は徐ろに口を開かれた。
『自ら善道に安んじ乍ら、親と主との惡道に踏み迷ふを許すべきか。又た狂ひ

酔へる愚人の毒杯を傾くるを見乍ら、默すべきか。是非を論ぜず親の命に從ひ、邪正を簡ばず主の仰せに順はん事、愚痴の前には忠孝に似たれども、賢人の意には之より過ぎたる不忠不孝はなし。今日蓮五々百歳の時を得て、妙法蓮華經の五字七字を弘めんがために身命を擲つ事、餘の義にあらず。迷へる萬民を救ひ、惑へる國家を泰山の安きに置かんと勵むのみ。』

上人は縷々と説かれた。

日昭を始め法弟達は心から恥ぢた。

この紀念すべき日に、筑後房と甲斐公の得度の式が、この荒廢した草庵で行はれた。

胸に燃え騰る信火と眞理の光りとは、二人の心をいよ〳〵接近させた。嚴かな上人に依つて、筑後房は日朗と、甲斐公は伯耆房日興と名乗るやうになつた。

かうして師弟の契りはいよ〳〵濃厚になつた。

日朗が前に氣を配れば、日興は後を警戒した。二人は上人の足となり手となつて從貪ふた。その間に日昭は二人に對して彼此と注意した。

雨の日も風の日も上人は、鎌倉の大町小町を縫ふて大法を宣傳せられた。而して夜になると、仄暗い燈火に照され乍ら、弟子や檀那のために、堅さは砕き足らない所は補つて要法の奥義を談られた。

かうして夜と晝との區別もなく時は經つた。

丁度上人が安國論を提出されてから、四十一日目の夜更けてあつた。草庵の周圍は、何と無く腥臭い風が吹き荒んて、草叢に集く蟲の音も途切れ勝ちてゐつた。

上人は、例のやうに手に汗を握り乍ら、諸宗は無得道てあつて法華のみが獨り成佛宗てある事を、大衆を前にして聲高く講じてゐられた。

と、裏の方から異様な群衆の叫びが流れて來た。

然共、上人は、何物も耳に止まらないやうに、鼕々と法鼓の鳴りを鎮められなかつた。

間もなく地軸を搖がす鬨の聲と共に、數百人の一團が草庵の周圍を取卷いたやうであつた。その聲を聞くと同時に、一座の人々は、それは權門の緇素が夜襲をして來たのだと云ふ事が解つた。炬火の焔の影には、甲冑を着たものや、墨染の衣を腰高に引絡げてゐるものもあつた。

これを見た進士善春は、『何に血迷つての夜襲ぞ！』と、腰の刄を拔くや否や燦く刄と刄との間へ跳込んだ。

『先づ上人を』と、弟子達は迷つた。右へ行つても左へ行つても遁ふべき隙もない。彼此する間に、草庵の裏からは黑煙と共に物の裂ける音が聞えて來る。最早救ふべき道なしと見た人々は、身命を堵してその一部を突破した。辛くも切り貫けて互に振顧つた時には、もう上人の姿は見失つてゐた。暗い森から谷

へと、探しに探し貫いたが見當らない。思ひ迫つて草庵の方を眺めると、僅かに燃え殘りの柱が慘めに餤に舐められてゐる。大路の邊りでは凱歌の聲が鳴り響いてゐた。同志は思はず熱い淚を流した。

尋ね厭倦んだ弟子や檀那達は、臍を噬んで夜の明けるのを待つた。短い夏の夜は明けたけれども、依然上人の行衞は知れなかつた。上人に災禍の降り懸る譯もないとは思ひ乍らも、仍且生死の程が氣遣はれた。切めては何かの紀念でもと、山や谷を渉つてその日も暮れた。

再び惠み深い日光を仰いだ朝、草庵から七八丁隔つた蕁草に埋れた岩窟で上人を見出した。白猿に導かれるともなく其處へ這入られた事が、後で解つた。草庵が灰燼に歸したので、散り〳〵ばら〳〵になつてゐた人々も集つて來て、やつと安堵の胸を撫下した。

集ふ場所とてもない蒼空の下で、上人と日昭等は要所々々に陣取つて救ひの

道を鼓吹した。瓦礫は霰の如く頭上へ降つて來た。

日増しに募る折伏の聲に、自分の立場の不安定になつて來たのに氣付いた諸宗の僧侶は、凝乎としてその成行を傍觀してゐる譯には行かなくなつた。かと云つて之を正面から對戰するためには、餘りに自分の足場の薄弱なのを呪はずにはゐられない。思ひ惑ふた末、尤も俗惡な政權の手に救ひを求めた。素より宗教とか國家とか云ふ事に就いて眞率に考へた事もなく、唯だ習慣と云ふ桎梏に引摺られてゐる政治家達であるから、一も二もなく權宗の要求を容れた。

二

時は弘長元年五月十二日、突如、執權の名の下に、上人は伊豆の伊東へ配竄の身となられる事になつた。

上人は刑吏に連れられて由井ヶ濱まで來られた。

不安な氣分を包んでひた〳〵と打寄せる波は、上人の行衞の程を思はせるやうであつた。上人は小ひさい舟に乗り移られた。白砂に刻まれた謎のやうな足跡を後に、軈て舟は纜を解かうとした。其時、小松の林を潜り脱けて驅け付けた日朗は、熱情に燃ゆる瞳を曇らせて『上人の御伴を』と切望した。然共、冷酷な刑吏には一冷笑にしか價しなかつた。斷念めかねた日朗は舷に手を掛けて飛込まうとした。その刹那、鐵のやうな堅い櫂は唸りを作つてその右の手に落ち碎けた。

彼此する間に日興も、徒跣の儘宙を飛んで馳せつけた。懐しい上人を、刹那を爭ふ波間に別れを惜む情と、血汐に染つた友を哀しむ念とは、一時に彼が肺肝を衝いて來て、霎時は勃然として何物も識別する事が出來なかつた。然し、再び我に復つた時、彼は片手は上人の袂を握り、片手は日朗を懐き上げて、涙の流れる儘に任せた。

獰惡な刑吏も、この急遽に襲ひ懸つた悲慘な光景に、その毒牙も鈍つた。

軈て些やかな舟は、荒れ狂ふ怒濤の中へ沈みつ浮きつ漂ひ出た。濱邊からは、絞つた聲が波に碎けて震ひ乍ら聞えて來る。上人は靜かに瞑目して念を凝らされた。——世は五濁の闇に鎖されてこれと云ふ光明さへも認められない。『如來の現在すら猶ほ怨嫉多し、況んや滅度の後をや』と、佛讖は虛言ではなかつたのか。今自分は只法華經を日本國の一切衆生の口に入れやうとする失に依つて、妻子も持たないのに犯僧と謳はれ、螻蟻をも殺さないのに惡名は到る處に響く。恐らくは釋尊を諸の外道が誹謗したにも勝つてゐるのであらう。之と云ふのも法華經を行ずる事の他の人々よりは優れてゐるからに違ひない。自分のやうな卑賤な無智無戒の者が留難に値ふ事を、今より二千餘年前に、法華經の中に書記されたとは如何にも不思議と云ふより外はない。これを思へば、讒言をした諸宗の人々は自分に取つては、この上もない恩人である。軈ては流罪死罪にも

遭遇する時が來るに相違ない。重なる呵責に値へば遇ふ程、法華經を信じた證左はいよ〳〵確實になるのである……自分の生涯が、法華經の文に着々と符合して行くのを上人は、心竊かに喜ばれた。

夕暮近くなつて海はいよ〳〵荒れて來た。伊東の濱が仄見えるやうになつてからは、時々舟の中へ波が碎けて散つた。刑吏は狂波と日沒を恐れて、程近くにある爼のやうな岩の上へ上人を卸して、舟を漕ぎ返して了つた。

上人は驚きもしないで、岩上に立つて情ない舟の後を見送られた。刻々に襲ふて來る怒濤は、四邊が暗くなるに連れて、岩の上まで舐め始めた。衣の裾を波の嬲るに任せ乍ら上人は、聲も惜まず『南無妙法蓮華經々々々々々々々』と唱へ續けられた。岩角に嘯く波の音と靈肉を絞つた妙音とは、美妙な旋律の裡に調和を作つて漂ふた。

不思議に上人は、その夜の間に漁師の船守彌三郎に救はれて、伊東の里まで

着かれた。

一時とても絶ゆる間もない上人の救ひの叫びは、この伊東の空にも鳴り渡つた。

軈て伊東の領主朝高が、上人の靈妙な法力に懾れて歸服してからは、上人の聲はます／＼高まつて行つた。

その間に日興は、幾度か上人の配慮を訪ねては、鎌倉との連絡を取つた。

一三

肉に窮迫すればする程上人は、靈に於てより以上の希望と慰安とを見出された。であるから長い配慮の年月も、知らず識らずの間に經つて行つた。

上人が再び自由な身となつて鎌倉に歸へられたのは、弘長三年の二月であつた。

久濶振りに弟子達を見られた上人は、思はず淚ぐまれた。それは世の常の情緒が釀す淚ではなくて、やがて自分の未來を飾る弟子達が、天晴一個の聖僧に成り濟ましたのを喜ぶ淸い玉露であつた。即坐に上人は弟子達を膝近く集めて懇切に諭された。法器が既に熟した上は、一日も早く一地域でも廣く大法を弘通する必要があつたからである。

日興の心は躍つた。上人から許された自分自身を振顧いて、彼は心から泣いた。——一個の人間として生れて來てからの短い自分の半生、その間には肉的に並ならぬ損失を蒙つた。勦はらるゝ事のみ多くて慰むる術も無つた幼い自分のために、生命を堵してまでもと希つて、それかあらぬか世を早くした父、病褥に呻吟する慈愛に窶れた母を親しく看る事さへもしなかつた恨み……唯だ殘り多いと思ふのはこの事である。靈に於て通ふ事の出來ないではないが、自分の肉體の生きてゐる限り、开處に悲哀の影の伴はない譯には行かない。死の洗

禮を受けた父と母との思出は、時に靈妙な囁ぎを打ち消す事がある。切めて若年乍ら、本化の一分としての今の光榮ある自分を、父と母との肉眼に觸れたなら……と心の緖の亂れを止める事が出來なかつた。

然共、忽ち心は春の如くに和いだ。――自分自身の光榮が、單なる父母の肉眼を喜ばすための光榮であるならば、それは空虛な光榮に過ぎないのである。父と母との短い肉眼の呼吸せる間のみの光榮であるならば、永劫不變な父母の靈魂の眼を何に依つて樂しませる事が出來やう。決して自分自身の今の光榮は、一時的な而も自分の兩親にのみ限られるやうな其麽狹隘なものではない。自分の光榮は人と人との間に、互に異つた感じを持たせるやうなものではない。高さと擴がりとが極度に行渡つた時の感じでなくてはならない、突き詰めれば時間と空間とを絕した感じである。自分の光榮と云ふさへ餘りに排他的である。然共、今の自分と云ふのは、決して自己の個體を指して云ふのではなくて、自

己に目覺めた靈魂の名である。部分的な我や自己ではない。生きた實相の大我それ自身である。この大我こそ自分の光榮そのものであつて、强いて名ければ妙とも云ひ得る。需め易くして得難い活けるこの妙、世の誰人もこの自己の光榮に生きなければならない……と、力强く感じた彼は、自分自身の感じその儘を、天下の總ての人々に味はせやうと堅い心願を立てた。

其處で彼は、上人の道善房に於けると同樣に、曾つて深い契りのあつた岩本の嚴慶律師を訪れるべく、駿河へ向つて出發した。

六年の間遠ざかつてゐた、岩本の山や川には何の變化もなかつたけれども、彼の眼には實相寺の內外が如何にも異樣に映つた。別に實相寺そのものが變つた譯ではなくて、見る彼れ自身の眼が既に疇昔のそれではなかつたからであつた。嚴慶律師にしても智海法印にしても、當時の彼に取つては、少からぬ尊敬と感化の的になつてゐた。であるのに、今になつて見ると、律師が其源を忘れ

て、徒らに眞言を加味した天台に心醉してゐるのが如何にも哀れてならなかつた。

彼は靜かに律師の反省を促した。——美妙な、併し死んだ冷たい實相を粉飾するのに、人を惑はす印眞言の麻醉藥を以てした架空的な論義は、如何にも華やかではあるけれども、目前に壓倒して來る現實の醜惡を、什麽してこれと飽和する事であらう。これを全く排除して其處に平和な天地を開拓するのであるか、それとも、その醜惡な現實の上に、巧に重ね得る理想の型を篏め合すのであるのか。若し現實を放棄するとならば、吾々の眞に生きて行く道は眞空の中に求めなければならない。重ね合はす事だとすれば、其處に表裏がなくてはならない。表裏でもなく眞空でもなく、理想即現實と言葉は如何に巧妙であるにしても、雲深く垂れ罩めて觀念の月を幾年月眺め盡した後に、逸かせば仍且淺薄な不徹底な而も縱橫に傷付く、哀れな現實の孤兒が喚き乍ら蠢いてゐるのを

什麽するのであらう。遂に人は迷ひ惑ふて、狂ひ狂つて、狂ひ死に死なねばならない。その迷ひを解きその惑ひを明らめさせ、その狂ひから醉まさせて、無限の生命に呼吸吹き復させるためには、日蓮上人自身に依らなければならない。上人自身を了解し、上人自身に共鳴し、上人自身に同感し、上人自身を自然の儘に理解する時でなければならない。……彼は諄々として解いたり碎いたりした。然共、既に老耄した律師の頭腦にこびり付いた臭味は、何うしても洗ひ流す事は出來なかつた。これに引替へて智海法印は、ます／＼上人を追慕する念が高まつて來た。

律師の頑强に失望した日典は『時を待つて』と未來に光りを認めて實相寺を出た。法印は來るべき日を約して別れた。

日典は、生ひ茂つた雜草を搔き分けて父の墓前に跪いた。うら寒い風がしきり襟を掠めて過ぎた。軈て彼は聲高く玄題を唱へた。と、蔽ひ覆さつた杉の

枝から冷たい雫が落ちて來た。

岩本を出てから日興は、足に任せて近郷を歩いた。時には加島、時には熱原、富士の裾野を登つては小泉上野石川、富士川を越えては松野と、展轉しては法鼓を鳴らした。初めは唯だ好奇心に驅られて集つて來たものが、時を經、度を重ぬるに從つて歸依するやうになつた。

早い日の追懷多い鰍澤へも行つた。

心の糧に餓えた人々は、毎日のやうに彼の周圍を取卷いた。

一四

文永元年の二月頃から再び熱原加島の邊りを巡錫した。吹き荒ぶ嵐の中も、降りしきる雪の中も彼に取つては寧ろ勇氣を增させる事になつた。薄墨の衣に甲斐々々しく脚絆と草鞋を穿いて、同じ道を日に幾度行つたり來たりしたか知

れない。少くとも上人から命じられた甲斐と駿河の二國だけは、自分自身が責任を以て化導すべき土地であると堅く心に銘じて、縦令この地に血塗つて枕する事があらうとも、妙法の寶土に化するまでは法の戰ひを繼續する覺悟を定めた。殊に彼が最も尊重な感じを以て受容れたのは上人の言葉であつた。凡庸ならぬ本化の再生としての上人は、爾前迹門の釋尊よりも更に尊崇すべきである事を忘れなかつた。であるから些々たる訓戒でもそれを嚴守して、他の誰人の容喙をも許さなかつた。一見それが杜撰であるかの如く思へる事でも、事實上人の口から漏れた事であれば、一々記錄して絶えず違背しないかを恐れた。單に師弟の關係から喚起される情愛のために、上人を戀慕し渴仰するのではなくて、自己の存在は軈て上人の一部分を形作つてゐるのだと云ふ、根深い信念の淵から溢出る絶對の敬虔がさうさせたのであつた。刹那々々に變轉極りない感情の流露に、重大な身心を任せるなどゝは、最も危險な事だと思つた。て、兎

角に眞理から遠ざかり易い感情を恐れて、常に自己の一擧手一投足悉く、上人の有の儘を眞似るべく熱注した。而してさうする事が彼の個性を沒了した姿だと云はれても、彼は何等の苦痛をも感じなかつた。寧ろ角の觸れる個性のないまでに、上人自身に溶和する事が彼の强烈な意志の表現であつた。それであるから、上人のそれに似る事さへも出來ないならば、眞の弟子でもなければ、心から純化された檀那でもない。生きて弟子檀那となる事も出來ないこの身ならば、寧ろ、燃え騰がるこの胸を搔き裂いて血汐滴る臟腑を、上人の足蹶に掛けて蹂躪られる方がましだと考えた。これがために彼は、化導の寸暇には必ず上人の述作を讀むか、さもなければ書寫した。而して身に口に心に銘じて之を行はうとした。人に對して法を說く時でも『上人が仰せられし』との言葉を漏らした事はなかつた。

それに彼が極く憎み恐れたのは、不明瞭と云ふ事てあつた。眞と僞と、正と

邪とを同時に、同じ場所に於て肯定する事を許さなかつた。一度上人の敎に浴してからの彼は、曾つた馴染んだ天台の氣分を根底から拭ひ棄てゝ、欠びにも不明な色彩を示した事はなかつた。

この撓める事の出來ない堅實な彼の氣質は、到る所て發露した。

何時か酷烈な夏の日が來た。

山も谷も一面に日光に照りつけられて、川の水はぶつ〳〵と沸ぎるやうになつた。その燒釜の底のやうな日盛りでも、彼の獅子吼の聲には弛みがなかつた。かうした不斷の弘敎の間にも彼は、上人の身の上を氣遣つては鎌倉へ使を送つた。使を送出しては、その歸へるまでは心穩やかてなかつた。歸つて來た一時は心安いが、又た歸つた跡の事が思ひ煩はれた。

それは丁度彼が、熱原の四辻に立つて泌み出る汗も拭かないて、救ひの叫びを揚げてゐた時てあつた。

息を切つて懸けつけた使者は、母君危篤の報に接して上人が安房へ下られた事を語つた。彼は霎時默禱した。そして心の裡で言つた『生殺自在なる我が師、憂ふるに足らず！』と。

この時から二度目の使者は、上人の法難の報告を齎らして歸つて來た。顫える手に書狀を握り乍ら、讀下した。それは十一月十一日の夕暮であつた。道善房を花房に訪はれた歸途、小松原を通り懸られた其時、陰森な闇から東條景信の一族が襲ひかゝつた。そして上人の額には三寸ばかりの刀痕が刻まれたと書いてある。彼は上人のお伴をしてゐなかつた事を如何にも遺憾に思つた。その瘡は怎んなに刻まれたのか、そして如何なる手當が施されたのかと、幻に畫いて心痛した。

唯だこの上は一日も早く上人の尊容をとは思つたが、上人の其後の住所も判然しないので、心ならずも鎌倉からの知らせを待つより外に道がなかつた。

一五

文永六年になつて日蓮上人は、多年の宿願であつた富士登山のために鎌倉を出發される報せが來た。其處で日興は足柄峠まで出迎へてお伴をする事になつた。

東の裾野を廻つて吉田から登山した。

崎嶇多い道を辿つて頂上に着くと、上人は自我偈を讀誦された。唱題を了つて、心靜かに麓の方に眼を落された。

霞に隔てられた山々の頂きは、漣のやうに浮いてゐる。南の方には、微かに駿河の海が白布を敷いたやうに見える。東を見ても北を見ても西を向いても、たゞ灰白色の霞が漂ふてゐるだけで、俗塵の穢れは何一つ眼を掠めるものもない。深い谷の底から捲き上げて來る冷たい風は、心を緊縮めて踏み占めた足に

も山の靈氣が通ふ。自然の美工とは云へ、八朶に開いた火口は何となく神祕な氣分を唆る。上人は霎時沈默して何物かを思合せられるやうであつた。

いよ〳〵山を下るやうになつて上人は、最とも明媚な山復を選んで、自寫の法華經一部を埋めて讀經された。日興はその近くにあつた小石を立てゝその標にした。十三國の山も野も谷も川も押し靡けて、九天の雲に聳えたこの秀麗な山の一角に立てられた、この小ひさい標石は何を意味するためであつたのか。

勝沼で、上人は鎌倉へ、日興は鰍澤へと互に別れた。

日興は笛吹川に沿ふて下り乍ら、村々で說法した。

朦朧げな記憶を辿つて鰍澤へ着いたのは、最早その年の暮れであつた。

此處に一月ばかり滯在してゐる間に、小笠原や秋山邊りを强化して步いた。

やがて春になつて日興は、富士川の畔を下山波木井の里まで下つた。此處で邑主の長男である淸長を敎化して、內房に出て松野まで行くと、豪族の松野は、かねて敎化を享けてゐたのであるから、暫く留まるやうにと聞かなかつた。

その間に、松野は自分の子甲斐公が實相寺に學んでゐるのを、呼び返して日興に引會はした。甲斐公は日興の敎義が如何にも切實で深玄な所のあるのに全く畏服して、弟子となるのを望んだ。然共、日興は自分の口に談り、身に行ひ心に念ずる所……凡て自分の色心の作爲は、悉く日蓮上人の一部の力であり光りであり響きである事を告げて、上人の弟子となるやうにと勸めた。

松野親子が上人の人格を渴仰して止まないので、日興は甲斐公を連れて鎌倉へ向つた。

途々、熱原加島で强化を布いて、二十日ばかりの後上人の草庵へ着いた。

上人は丁度大衆の前で大獅子吼をしてゐられる所であつた。一目見るなり甲斐公は身體中が緊張るのを覺えた。家こそ荒れ果てゝはゐるが、その衣こそ破れてはゐるが、物凄きまでに爍く瞳。轉び出る玉の如き聲、全身から發散する

熱、周圍を取卷く弟子檀那の唱題の聲とは、暫らく甲斐公の意識の眼を暗ました。

軈て說法が了ると日興は懇懃に甲斐公の願ひを傳へた。

上人は、その潔く自宗の邪義を捨てゝ、正義に跪かうとする心根を稱歎して、即坐に授戒して日持の名を與へられた。

日興は幾年月とも數知れぬ長い間を、便りこそ互にしたものゝ、親しく見る事の出來なかつた日昭日朗の健やかな姿を見て祝いだ。其處には彼が見も知らぬ弟子達が居並んでゐた。日朗は一々紹介して吳れた。それで其はかねて聞いてゐた日向日頂である事が解つた。

肉體こそ個々別々に場所を異にしてはゐるけれども、心は同じ大海の鹹味を嘗めてゐる弟子達は、初めて知り合つた間にも、生れ乍らの知己のやうな所があつた。

その日から日興は、日昭等と一緒に大街小街で大呼した。歸つて來ては研究と書寫とに勵んだ。

師と弟子との折伏の聲が日に增し劇烈になるに連れて、各宗の緇素から受ける迫害はいよ／＼強くなつた。その迫害の熾烈になればなる程、獅子吼の叫びはより鋭く高まつて行つた。

街々を往來ふ人々の顏には、云ひ知らぬ憂鬱な色が動いて來た。家や草木にも不安な氣分が仄見えて來た。然共『念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊』の進軍の歌は彌々廣く鳴り渡つて『妙法蓮華經』の旗印は彼方にも此方にも飜つて來た。

一六

翌る年の文永八年二月頃からは、正嘉年中にあつたやうに、名も知れない病

が流行したり、時ならないのに風が吹いたりした。そして彼方にも此方にも地震や海嘯があつたりして、人々の心はいやが上にも暗くなつてゐる所へ、雨の降らない日が幾月と續いた。

て、執權の時宗は最も法力驗著と謳はれてゐる良觀に命じて雨乞ひの祈りをさせた。

これを聞いた日蓮上人は、良觀の所へ使ひを遣つて、法力の如何に依つて各自の宗義の眞僞を決しやうとせられた。良觀は進んでこれを承諾した。

いよ〳〵定められた日は來た。

良觀は自分の寺の境内にある靈山ヶ崎に修壇を構へて、熱血を絞つて祈つたが何の驗もない。二日經つても三日經つても、一滴の雨さへ降らない。七日の日は暮れても、毬程の雲さへも姿を見せない。て、同輩である行敏や念阿も來て、聲荒らげて應援したけれども、遂に得る所は仍且旱魃であつた。

既にその期間が經過したので日蓮上人は、再び使て以て自らの法力を示すべく告げられた。

上人は日朗日興の二人をつれて、七里ヶ濱の近くにある田鍋ヶ池の邊りに立つて、徐かに經文を讀出されると、忽ち乾坤を覆へす強雨が降つて來た。て、上人は前約であるから良觀の改宗を促された。

最早眞正面に會はす顏さへない良觀は、心の中で甚く上人を恨んだ。

日蓮上人は、良觀に歸服の誓を果すやうにと逼ると同時に、國家の災禍を根本から排除するために、公場の對決を時宗に要求された。安國論に示した如く、蒙古から牒狀の來たのは他國侵逼の難ではないかと詰られた。

恁うして有力な武官や僧侶に對しても一々書を送つて痛罵された。

突然、九月十日に上人は問注所へ引出されて、いろ〳〵糾彈された。

然共、それはほんの形式に過ぎなかつた事が直ぐ解つて來た。その翌々日、

不意に上人は龍ノ口で死刑に處せられる事になつた。

白馬に乘せられた上人が、鎌倉の八谷七郷を引廻された後て、八幡宮の前まて來られた時、四條金吾は宙を飛んて馳せつけて、『靈山の御供を』と涙ぐんだ。

馬の轡を控へて上人は、靜かに口を開かれた。

『不覺の殿原かな、これ程の喜びをば笑へかし。この娑婆世界に於て、雉となつては鷹に捕まれ、鼠と生れては猫に喰まるゝ習ひ、或は妻子のために身命を擲ちし事大地微塵よりも多かるべし。而も法華經のためには一度とてもなし。然るに日蓮貧道の身と生れて、父母の孝養心に足らず。又た國恩を報ずる力だになし。此度頸を法華經に捧げて、其功德を父母に回向し、其餘は弟子檀那に配當べし。各々思ひ切り給へ。此身を法華經に替ふるは石を黃金に代へ糞を米に代ふる悅びなり。今日蓮は日本第一の法華經の行者なり、而も身には一分の過なし。されば、若し日蓮が頸刎ねらるゝ事もあらば、不思議の事もあるべし。』

言ひ殘して上人は龍ノ口の頸の座に引いて行かれた。

上人は默然として座に着かれた。

依智三郎が振翳した名劍蛇胴丸も、神怪な唸り靈妙な光り不思議な力に遮ぎられて中有に迷つた。

刎らるべく見えた上人の頸は、かうして刎られなかつた。

日昭等が此處へ駈けつけた時は、もう上人は頸の座から立つて、依智の邸宅の方へ雜兵に續まれ乍ら行かれる處であつた。

夢かとばかり彼等は喜んだ。然共、それはほんの束の間てあつた。やがて北海波荒い佐渡へ流されるのだと知つて、又も彼等の心は曇つた。

踏み擢く濱の眞砂も噓欷くかのやうてある。寄せては返し返しては又寄せる男波女波の咽ぐ聲にも、悲痛な響きが籠つてゐる。彼等は口を噤んて唯だ默々と行く。

上人の行手を思ふて涙ながらに草庵へ歸つた日昭等は、頭を集めて熟議を凝らした。到頭、互に牒し合はして由井ヶ濱の彼方此方に別居する事になつた。闇に薄れ行く上人の黒い影を見送つてから、最早二月は過ぎた。法弟檀越は、人目を忍んでは集つて上人の噂さに日は暮れた。

由井ヶ濱邊に嘯く波が物凄く聞えて來て、磯の小松を襲ふ汐風が喚く日であつた。上人から便りがあつた。寄り集つた人々の前て、日昭は押頂いて書面を繙いた。

『此比は十一月の下旬なれば、相州鎌倉に候ひし時の思ひには、四節の轉變は萬國皆同じかるべしと存候ひし處に、此北國佐渡の國に下着候て後、二月は寒風頻りに吹いて、霜雪更に降らざる時はあれども、日の光をば見ることとなし。八寒を感㆓現身㆒、人の心は同㆓禽獸㆒不㆑知㆓主師親㆒、何に況んや佛法の邪正、師の善惡は思もよらざるをや……』

一七

並居る人々の眼は霞に曇つた。別けても日興は、幼い時分から霜雪に惱んだ苦い印象が刻まれてゐるので、絶えず南の國にのみ生活した日蓮上人は、什麽なにかあの灰色な穹窿に鎖された北國の風雪に、痛いその日を送つてゐられるてあらうかと、伊東の配處の辛苦に思ひ較べては、ほろりとするのてあつた。

思ひ慕つた日興は、堅い覺悟を懷いた。

名のみに聞く、雪吹き荒ぶ佐渡ヶ島に上人の朝夕を助けるためには、酷寒に馴染んだ自分の外にはない。縱令道の程は什麽に遠いにしても、その間に蒙る苦患は什麽に悲慘てあらうとも、徒らに土地を隔てゝ懊惱するよりはと、深く決心の臍を堅めた。

旅裝もそこ〳〵に備へて彼は、その夜人知れず鎌倉の街を離れた。人目を忍

ぶ身の行くべき道も判然しないが、と云つて訊ねるのも心遅れた。時には思はぬ山道に踏み迷ふて、岩角を匐ひ上つたり、蔦蔓に力を借りたりした。山を傳ひ峯を傳つて、歩くべき道はあり乍ら、胸に荊もつ身には兎角晝間の道は眩しかつた。思はず漏れる唱題の聲も、それと氣付いて嚙み殺す事も幾度かであつた。心は生死の外に遊樂してゐても、遉がに肉身は凡夫の姿であるから、野を行き山を越えるのにも憚りが多くて、草木の戰ぐ聲も追手の忍音かと訝かつたりした。

怒濤に弄ばれ乍ら、漸く佐渡へ着いたのは十幾日かの後であつた。

上人の姿を見出したのは、ある夕暮の雪の日であつた。夢かと上人は驚かれた。

日興は上人の身の上を尋ね乍らその姿を看守つた。思ひに増して窶れさせられた顏の色、聲さへ兎角澁り勝ちてある。口には

出さないが寒さのためだとは、直ぐ知れた。拾ひ集めた木片に火をつけ乍ら、つく〲住居の樣子を見ると、番小屋に等しい荒れた堂である。大地に打込んだ四本の丸木に張り付けた壁板も半ば剝れて、降りしきる霙は思ひの儘に吹込む。見渡す限り一面の墓場は雪に埋れてゐる。牀と云つても冷たい板の上に敷皮一枚、寒さに堪へかねて上人は、蓑笠を着乍ら鎌倉の近狀を尋ねられた。

日興は頓に言葉も出なかつたが、漸く、

『既に御存念の事にも候はん、上人の鎌倉を立たゝせ給ひしよりは、却つて後難のいや増す事もあらんかと、一同相謀つて草庵を引揚げ、由井ヶ濱邊に如說の修行を仕り、日夜に御身の上に思ひ到らぬ時とては候はぬ上、哀れや筑後房は囚はれの身、嘸ぞや牢中は寒さに辛からんと、思はず涙に暮るゝ事も候ひしが、……さるにてもかく荒れ果てたる三昧堂に、幾十日と過ごさせ給ひし御艱苦の程、思ひ浮ぶるさへ涙……』

後は涙に聲が澱んで了つた。

暫らく沈默が續いた。

何時の間にか焚火が衰へて、急に四邊が薄暗くなると共に寒氣立つた。霙は音もなく降りしきる。

日輿は油火を點けて、焚さしを繕つた。

法門談義に夜は更けて、骨の髓まで凍えるやうに寒さが劇烈になつた。

ふと、裏の方から雪を踏み摧く音が聞えて來た。

『さては讎の襲ひ來れるにあらずや……』と、日輿は心を許さずその音の流れて行くのを聞き澄した。

聽てその足音は戸口の所で礑と歇んだ。そして暫らく雪を拂く音がした。

きつと身構へして日輿は、戸の開くのを待つた。

『上人、この嚴しき寒さに御身の上別狀も候はずや。』

と、笠を脱ぎながら五十近い男が、閾を跨いで這入つて來た。そして見知らぬ日輿の居るのに氣付くと、思はず避易だ。

『夜な〳〵の御訪づれ、夢かと覺え幻かと見參らせ候。』

上人は懇ろに言葉を返された。

日輿は幾度か自分の意識を疑つた。

上人の説明で、その男は遠藤爲盛と云つて、妻と變る〳〵夜更を待つて、上人に報謝をするのだと云ふ事が分つた。

疑惑と不安の雲が霽れて、三人は凍りついた冷たい牀の上にゐながら、宛然春の花野を彷徨ひ行く心地で、何時までも〳〵談は盡きなかつた。

その夜は互に寢つかれなかつた。

夜來の降雪はからりと晴れて、氷は幽かな音を立てゝ解けた。

上人は些やかな壇上に安置した立像の釋尊に向つて、一乘の法味を捧げられ

た。日興も合掌讀誦した。やがて彼は甲斐々々しく立働いた。

塚原の冬は、斯うして晴れたり曇つたり降つたりした。

その間にその年も暮れた。

正月の末方になつて、念佛や禪宗の僧侶が、山のやうに押寄せて來て法論を挑んだが、譯もなく破折されて了つた。

それから後は法論の傍ら心血を絞つて上人は、開目鈔とか當體義鈔とかいろいろな著述をされた。

住居が一ノ谷へ移つてから、自ら『日蓮當身の大事』と劈頭に掲げて筆を染められた、觀心本尊鈔や大曼荼羅が世に現はれた。この繁忙な間に、最蓮房や本間重連などの數百人を敎化された。日朗が上人戀しさの餘り、密かに獄吏の許しを得て、晝夜の隔てもなくはるばる訪ねて來たのもこの時であつた。

上人が佐渡へ渡られてから最早足掛四年の星霜は過去つて、やがて彌生の空に小鳥が囀る頃となつた。

上人出世の本懐は、日一日と人心を包容して行く。自己本地の自覺に立つて、社會救濟の道は行く所に開いて行つた。

一八

それはある眞暗な晩であつた。病に惱む最蓮房を勦り乍ら家まで送り届けた日興は、炬火を振り翳しつゝ坂道を一ノ谷へと登つてゐた。坂を登り切つたと思ふ頃、何處からともなく微かな唱題の聲が途切れ／＼に流れて來る。上人の聲が届く所でもないこの山坂に、珍しくも唱題の聲が聞かれるのを訝り乍ら、暫時立ち止つて耳を澄した。細く幽かではあるが確かに人の聲である、而もそれは道もない蔽ひ覆さつた森の近くから響いて來る。彼は炬火の灰を拂つて、その聲のする方へ荊棘を搔分け乍ら下りて行つた。と、其處の石に凭れて苦し

い息も斷え〳〵に『南無妙法蓮華經々々々々々々々』と唱へ續けてゐる若い僧侶がゐた。

炬火の光りも、近づく足音も意識には上らなかつたのか、『やゝ、筑後房にてお座さずや』と呼び醒まされるまでは唱題を止めなかつた。

『御身は……伯耆房にて候はずや！』と、涙と共に起き直つて、『奇しきは妙法の力！計らずもこの山道に踏み迷ひ、行手は分かず足は萎え、心ばかりは爆急れども、暗さは暗し眞の闇、詮方盡きてこの石に一夜の宿りを託せしが、御身に此處で會はんとは……それはさて措き、喜び給へ、恩師の流罪は赦れ候ぞ。その書狀は、これこの包に』と、頸に掛けた風呂敷包を指さした。

『さては恩師の流罪は赦れたりとな！』

嬉し涙に搔き暮れて、互にしかと抱きついて、霎時は木葉の戰ぐ音のみであつた。

軈て日興は日朗を劬り乍ら草庵まで導いた。

上人は豫めその事を知つてゐられたやうであつた。

『住めば都』の習ひ、増して到る處靡かぬ隈もない、上人が四年の長い月日を送られたこの島から、立たれると聞いた弟子檀那は、我勝ちに一ノ谷へ押し懸けて來た。

涙ながらに別を惜む人々を、上人は靜かに宥められた。

『今生は暫しのお別に候。未來際までもと契りし各々、梵天帝釋四大天王の御前にても、日本第一の法華經の行者日蓮房が弟子檀那なりと名乘りて通り給ふべし。若し日蓮より後に來り給ひ候はゞ、靈山へまし〳〵て艮の廊にて尋ねさせ給へ、必ず待ち奉るべく候。』

人々は袂を絞つて後を見送つた。

鎌倉に歸つた上人は、三度幕府を諌曉されたが、何の要領をも得られなかつ

た。て、かねて歸依してゐた波木井實長の所有である甲斐の身延山に閉籠られる事になつた。お伴には日昭を初め法弟檀越が陸續と從つた。

身延へ着かれたのは五月の中旬であつた。五月と云つても土地が土地だけに、春の氣分が到る處に溢れてゐた。

實長に導かれて上人は、草庵を建てる爲にいろ〳〵とその場所を探つて歩かれた。險しい岩角を傳つて身延の山頂に登つて見渡されると、富士川や早川が、綠な漣のやうな山々の間に仄白く浮いてゐる。富士の高嶺は白い雪の額を見せて居る。安房の空と思はれる東の空を仰いで上人は、亡き父母を偲んで題目を唱へられた。

上人は盡きぬ風致を稱へ乍ら、谷へ下たり林の中を潜つたりして跋渉された。身延川に沿ふて、北には欝蒼とした身延の山、西には紫色にかすんだ七面山、南には鷹取山などの山々を仰ぎ乍ら登つて行くと、其處に一町四方位の平坦な丘があつた。振返つて見ると、東の方遙かに天子ヶ岳の頂が霞を突いて聳えてゐる。

上人はこの丘に立つて神さびた光景を飽かず眺められた。足下を迸る碧水は四德波羅密の響を傳へて、樹木を渡る微風は自づと常樂我淨を奏てるやうである。谷間に咲く尾花も中道實相の色を染めて、日陰に綻ぶ梅も界如三千の薫りを送つて來る。

上人は雲時醉へるもの丶如く立竦んでゐられた。軈て實長を振顧つて歎美された。

『商山の四皓が所居とも謂ふべし。或は古佛經行の迹ならざるか、景雲朝に立ち靈光夕に現ず、嗚呼この地なるかな〳〵。』

その日から實長は、人々を驅り集めて、假の草庵を作り上げた。

此處で上人は、晝はひねもす夜はよもすがら唱題と讀誦に身を任ねて、表面

世を避けたものゝ如く見せて、緘默の裡に溷濁した人心を洗滌しやうとされた。その暇を見ては、註法華經を前にして、幽玄な哲理を現實に飽和して、法弟達の心情を堅實にされた。日興は一語一句も漏らさず書取つた。

寄る年波に上人も、亡き後の事を思ひ廻らされた。四海歸妙の實を擧げる第一着として、法弟達の部署を定めて弘敎の地域を定められた。日昭日朗は湘南に、日向日頂は房總に、日興日持は甲駿の地に派遣される事になつた。而して各自に阿闍梨號を授けられた。白蓮阿闍梨と日興は呼ばれる事になつた。

一九

單獨弘敎の途に登つた日興は、再び岩本實相寺へ行つた。前に懇切に說いて容れられなかつたので、『這度は』と多大な希望を持つて行つたが、嚴慶律師は前年の暮れに沒つたといふので、非常に殘多く思つた。て、彼は苔むした古塔の

間に寂しく立つてゐる新しい石碑の前で、報恩の法味を供へて、『今一年の餘命ありしならば』と徐ろに涙ぐんだ。

後住の嚴譽律師や學徒と一月の間、殆んど寢食も忘れて、法論に花を咲かした。焰を吐く日興が舌に、四十九院の大衆の半ばは、自己を振顧つて恥ぢもし恐れもして、心竊かに彼を憧憬れた。然共、嚴譽は、火の如く熱狂してその筋も亂れ體も壞れて、唯だ感情の奴隸となつてゐるばかりであつた。

時期早しと見た日興は、その足でかねて本化の敎に歸依してゐる熱原の邑主神四郎國重の家へ行つた。

國重は小躍りして迎へた。

その夜は、上人の動靜から法門の談と、夜を徹して談した。

『さて御房よ』と、國重は思入つた風で、兄の彌藤次が念佛に耽溺してゐる事から、越後公と云つて自分の長男が眞言の瀧泉寺に學頭をしてゐて、法華經の妙

味を聞かしても一向に用ひない事などを、齒軋りし乍ら悔やしがつた。

その翌朝國重は、日興と一緒に瀧泉寺へ行つた。豫め知らせてあつた瀧泉寺では、日興と法戰するために悉ての準備は整つてゐた。

宏壯な佛殿には幾十百と數知れない學徒が、星の如くに居並んて、中央上壇には五人の學頭が狂つた猿のやうに眼を嚇らしてゐる。

其處へ日興は色も變へないで這入つて行つた。

『如何に日興の御房とやら、日來聞き及ぶ法華經の利益、旁々以て不審の廉多し。それはさて置き、先づ御房の奉ずる法義の大綱を聞かん。』

學頭の一人は、日興の姿を見ると直ぐ口を切つた。

大衆の視線を悉く身に浴び乍ら、日興は靜に口を開いた。

『誠にその法の是非を究めんとならば、耳を洗つて伶倫が耳に寄せ、目を澄して

離朱が眼に藉り、心を鎭めて、我が師日蓮上人の敎を聞かれよ。抑も一代聖敎八萬法藏の多き、敎に大小權實あり、宗に事理顯密あり。されど、鹿苑施小の昔は、化城の戸樞に導くと雖も、鷲峯開顯の筵には、法華經已外の諸經は其得益更になし、還つて惡道の業因たるべし。』

『さては不思議の說を承るものかな、如來一期の聖敎は何れも衆生濟度のためなるべし。始め七處八會の筵より終り跋提河の儀式に至るまで、何れか釋尊の所說ならざる。縱令一分の勝劣をば判ずるとも、何ぞ惡趣の因といふべきや。』

『さてとよ。這は我が師日蓮上人當身の一大事、今暫く其大途を示さん。夫れ敎主釋尊十九出家三十成道の刻みに三惑頓に破し、無明の大夜爰に明けたれば、正しく本願に任せて、一乘妙法蓮華經を宣べんとし給ひしが、機緣調熟のため、且らく四十餘年の權敎を施設し、其の機調熟の曉を待つて、御年七十二歲にして始めて、その本懷本地甚深の奥藏たる妙法蓮華經を說かせ給へり。滅後に於て

御房達の如き疑惑の生ぜん事を恐れて、豫め法華經の序分たる無量義經に於て、『我先に道場菩提樹下に端座する事六年にして、阿耨菩提を成ずる事を得たり。佛眼を以て一切の諸法を觀ずるに宣説すべからず。所以は如何。諸の衆生の性欲不同なるを知る、性欲不同なるを知るが故に種々に法を説く、種々に法を説く事方便の力を以てす。四十餘年には未だ眞實を説かず。』と、佛讖誠に御房達が今日に符契せり。是れ全く空拳を以て嬰兒を賺かすが如く、種々の計畫を以て四十二年の間は、未だ本懷を説き給はざるを判じ給へる文ならずや。次に法華經に來つて、『正直に方便を捨てゝ但だ無上道を説く。』又た『餘經の一偈をも受持すべからず。』と、禁しめ給ふ。實に善惡邪正火を見るよりも明白なるにあらずや。所詮當時の直言念佛禪律、八宗十宗蘭菊の美を競ふと雖も、經文の如くならば何てか無間大城の苦を免るゝを得べきや。法華經第二の卷に、『若し人此の法華經を信ぜずして毀謗せば、則ち一切世間の佛種を斷ち、其人命終るの時阿鼻獄に入るべし。』と結ばせ給へり。結句一代聖敎の功德は法華經一部に納り、法華經一部の功德は妙法蓮華經の五字に籠れり。靈山の雲の上、鷲峯の霞の中に釋尊要を結び、地涌付屬を得たるも、その法體はこの五字の要法にあり。天台妙樂の六千張の疏、玉を連ぬるも、道邃行滿數軸の釋金を竝ぶるも、皆な妙法蓮華經の五字を出てず。所詮妙法蓮華經とは、法華經を信ずる吾等が己心の名なり。この理を知つて南無妙法蓮華經と、己心の名を喚び醒ます時、煩惱業苦の三道は法身般若解脱の三德と顯はれ、實報寂光の臺に登り、本有三身の大自覺に到達せん事疑なし。』

言々句々血の叫びてある。

大衆は手に汗を握つて、無念の齒を嚙締めるだけてあつた。慯うして石は飛び瓦は空に叫んて、忽ち堂内は修羅の衢と化した。

日興の身の危いと見た國重は、狂へる如く群衆を掻き分けて堂内へ這入つた。

二〇

虎口を遁（のが）れた日與は、國重の邸宅（やしき）へと急いだ。

と、誰か呼ぶやうな聲がするので振返つて見ると、それは學頭の越後公下野公の二人であつた。

二人は追ひつくなり前非を悔いて心から誓つた。

『あはれ美（いみ）じき法門にて候ものかな。いてや今より一實の經王を受持し、三界の獨尊を本師として、今身より佛身に至るまでこの信心を敢へて退轉なけん。設ひ五逆の雲深くとも、願くは提婆達多（だいばだつた）が成佛を繼ぎ、十惡の波よし荒くとも希くは王子覆講の結縁に同じからん。』

日與はその姿から言葉まで一々注意してゐたが、

『誠に殊勝なる發心、さり乍ら人の心は水の器（うつは）に從ふ如く、物の性は月の波に

漂ふにも似たり。御房達當坐は信ぜらるゝも後日の程計り難し。されば明日とは云はず只今より、我師日蓮上人に見參せらるべし。凡そ其里懷（さとゆか）しけれども、道絶え緣なくては通ふ心も疎かに、其人戀しけれども契らぬには憑（たの）むべくもあらず。色なき人の袖には徐（そゞ）ろに月の宿ることかは。』

歩き乍ら語つた。

その日の暮方になつて、日與に學頭二人と國重を合せて四人は、身延の山を指して登つて行つた。

道々國重は𠯁（くど）い程我子の歸服を喜んだ。

身延へ着いたその日、上人は越後公に日辨、下野公に日秀の法名を授けられた。そして一場の法話を試みられた。

三人は言葉もなく感淚に咽んだ。

『縱ひ頸を鋸にて引き切り胴をば稜鉾（ひしほこ）を以て突（つゝ）き、足には鈨（ほだし）を打つて錐を以て

摑むとも、命の通はん程は南無妙法蓮華經々々々々々々々と、唱へて唱死に死するならば……』

この痛切な上人の聲を聞く頃には、國重は手に汗を握つて口の中で微かに題目を唱へてゐた。

三度熱原に來た日興は、日辨日秀の助けを得て、いよ〳〵熱烈に敎を弘めた。時には岩本に時には瀧泉寺に、大衆に對して逆化の緣を結んだ。

その間に熱原の全鄕が、殆んど本化の大法を奉ずるやうになつた。然共、彌藤次入道だけは、徒らに念佛を固守して題目を呪ひ惡んだ。それがために、弟の國重は素より日辨の心苦しさは一通りではなかつた。舍弟の彌次郎彌五郎などは、叔父の心を知りかねて、罵るやうな事もあつた。て、其麼な事のあつた後は必と國重などに痛く當つた。それでも姪の初春にだけは、何時も優しい言葉を掛けて何かと面倒も見て遣つた。

時として國重は、寢られない夜などには、腐爛し切つた世の光景や舍兄の事などを思ひ浮べて、獨り癒やし難い心の惱みに悶える事もあつた。——泥よりも穢れ果てゝ、羽にも增して輕薄になつた人の心は、何處まで濁つて行くのか解らない。權門貴顯の袖に縋つたり、名家豪族の前に腰を屈めたりして、唯だ名利々々と、血眼をして漁つて步くのが如何にも情ない。それにしても、何故に舍兄は永刧搖がぬ妙法を信ずる事が出來ないのであらう。信じないばかりでなく、月日を重ぬるに從つて却つて、自分達を怨むやうな樣子の見えるのは什麼したものであらう……國重に取つて、身を切られるよりも痛かつたのは、この解けない謎を解かねばならぬ事であつた。

二

日興の眼に最も銳く映ずるのは、身體でもなく自己でもなく、日蓮上人であ

り、上人其自身たる妙法であつた。であるから、凡て妙法に背反するものは悉く之を惡み之を責めた。從つて腐敗し切つた國家は一日も早く破壞して、常寂光土を建設するのにその日も足りなかつた。その間に身體は驚くべく衰弱した。これに氣付いた日辨日秀を初め信徒は、一時も早く療養をするやうにと聞かなかつた。で、建治二年の暮に彼は、伊豆の熱海に轉居する事になつた。

人々の勸めとは云へ、それが自分のための入湯であるのを思ふと、一日も凝としてゐられない。暇さへあれば近傍の辻々で大法を敷いた。

二十日ばかり滯在してゐるうちに、進んで法門を聞かうとするものがだんだん殖えた。その中で新田重綱は、一人の子供を連れて『御弟子に』と望んで來た。非凡な子であるので、彼は快く請ひを容れた。而して蓮藏房日目と名を與へた。

新たに弟子を得た日興は、上人の印可を得るために、身延へ登山した。而し

て自分に代つて給仕を務めさせる事にした。彼は此處に止つて、上人に代つて筆を取つたり、波木井小笠原秋山邊りまで布敎に出掛けた。度重なるに連れて入弟を望むものが幾人か出來て來た。秋山から來たのを寂日房日華と呼んで、小笠原から來たのを百貫房日仙と名づけた。その間に奥州から日目を慕つて來て弟子になつたのは、了性房日乘と云つた。

日に月に信徒の增加すると共に、弟子も多くなつた。翌年の十一月になつて、岩本や瀧泉寺の緇素が不穩な態度に出て來る事を、知らせるために日辨が登つて來た。其處で上人は、日興と日持に命じて面目を傷づけないやうにとの事であつた。日辨は二人の俊傑を力に熱原へ歸つて行つた。

日興は國重の家を定住所にして、岩本や瀧泉寺へ絕えず往來して、法の邪正を決すべく促した。然共、彼等は面は柔かく見せかけて、何時も取合はなかつた。とは云へ、既に兩寺の大衆の過半は、本化の敎風に心を傾けてゐた。田中

加島の人々も漸次慕ひ始めて來た。智海法印も身延に走つて了つた。彼此する間に弘安元年の春になつたが、嚴譽からは法論などの事に就ては何の回答もなかつた。

口を噤んだ嚴譽が、竊かに日興の德望が日一日と擴大して行くのを心惡く思つて、外道の名を被づけて富士一帶から擯出しやうと、計畫てゐる事に氣付て、日興日持日辨日秀の四人は、連署して公に嚴譽と法義の邪正を對決するやうにと、鎌倉の奉行所へ願ひ出た。然共、嚴譽をかばつて、荏苒と日を延ばして何の便りもしなかつた。で、幾度か使者を遣つて促したけれども、唯だ取留めもない事を云つて、其場を遁れて居た。

春は過ぎ夏は來て、何時か世は秋となつた。

袂に寒い鷹取颪に秋の哀れは一入身に滲みるやうになつた。黃金色に豐かに實つた田面を見ると、心樂しくない譯でもないが、落ちて行く富士の川瀨は、不

安な響きを立てゝ咽んだ。

小泉上野の鄕へ强化に日興等の出て行つた後の國重は、急に物寂しい氣分に襲はれた。

道に從つて疚しい所もなく、禍福を運命の弄ぶに任せた國重も、日が沈んで周圍が暗くなるに從つて、何とはなく悲しい雫が心の中へぽたり〳〵と落込んだやうな氣がした。

國重は燈火を點け乍ら戶外を覗いて見た。漆のやうに黑い闇の中で悲しげに蟋蟀が二聲三聲啼いた。彼は彈かれたやうに佛前に跪いて、軈て經を讀み始めた。

三

『國重は居るか？』

突然、闇の中から聲を掛けたものがある。

國重は、聲張り上げて讀み續けた。

『生讀みの御經を讀むなどゝは、生意氣千萬。』と國重の肩を拂き乍ら、『さあ、今宵は確かな返事を聞かう。飽くまでも法華經は有難いと申すか、命を懸けても？』

『…………』

『この彌藤次の聲が聞えぬか、これ國重！』

『…………』

臺所から走つて來た初春は、國重の答へのないのを見兼ねて、兩手を突き、

『叔父上、かねて私を可愛がつて下さる、そのお心がありながら、何故父上をば愛うは覺さぬか！』

眼には玉なす涙が澱んでゐる。

『神四郎を！國重を！』

『今承れば、父上をば殺さうとなさるとやら。』

『うむ、惡人なれば。』

『惡人なればとて、殺すなどゝは。……それに叔父上は、佛門に身を寄せ乍ら…』

『默れ！其方まで庇ふか！』

『私は庇ふ、討たれても庇はるゝものならば、現の今にも私を討つて。』と掌を合す。

『何處まで其方は邪魔をする！』

『邪魔ではない、願ひなれば……人を苦しむる手を以て、その半分なりとも助くる心があるならば、如何ばかり心嬉しいか、嬉しうは覺さぬか！それに原因を正せば、父上とて、何の罪過のお坐するぞ、皆んな腹黑き人達の虛言……』

と、兩手を顏に押當てゝ、わつと泣出した。

『さても女子は脆いもの。して神四郎、其方は犬の如き彌藤次とばし思はふの

う。犬でも狼でも苦しうない。犬ならば犬として、其方には生死の境。それても仍且、南無妙法蓮華經が戀しいか！何？命を捨てゝも念佛は出來ないとな！思へば今までともなく、思ふ仔細もあれば瀧泉寺行智を邸宅に忍ばせ、私かに其方が心の解けんかと、なせし苦心も水の泡。實相寺嚴譽より左工門殿へ内訴せしより、さらば云ふべき筋ありと、先刻内管領へ走りし彌次郎共、可愛想なれども途中で既に召捕りしぞ！』

『なゝ何んと！哀れ不束乍らこの國重罷在らば……さても心外な、思へば此國重、日蓮上人の門下となつて既に六年、物の數ならぬ我なれども、この熱原のためには唯た一人の村長、又た越後公が我亡からん後、父の信念の程如何にと、子心に回想して人知れず片頰の笑みを浮ばすも、浮ばせざるもこの我が覺悟只だ一つ。善につけ惡につけ、法華經を捨つるは地獄の業。緣も緣もなき阿彌陀如來に何に頼み申さう。如何にも、この妙法ばかりは念じ申す。殊には這度の

如き大事の場所、命を的に懸けて天晴の冥利を得るこそ、我子の一生にも餘慶を殘し、自らとても靈山淨土にして功名を期すべき。』と聲張揚げて、『子孫の爲には末代の敎訓、上人門下のためには萬年までの鑑、餘人の腹はいざ知らず、國重のみの腹に問ひ、展るか反るかの關所、この身を法華經に替ゆるは、石を黃金に替へ塵芥に米を代ふる喜び、死に花咲くとは兄上、嬉ばしき限り……』

『默れ國重！言はして置けば我れ面目の勝手な理屈、世に癡けたる乞食坊主の日興共に、何に勾引されての亂心ぞ、狂氣とも云はう樣なき不所存者奴が、法華經に替ふる命は石に黃金を替ふる喜びなどゝ、寢言を云ふにも程こそあれ。寢氣醒ましに……』

と、榮螺のやうな拳を振上げたのを見て、『叔父上！』と我を忘れて初春は、その膝に取り縋つた。

三三

その夜の明方であつた。國重は固い誡めの繩に縛られて、平の左工門を頭に二十餘人の夥兵に取巻かれ乍ら、鎌倉へ牽かれて行つた。而して牢獄に押籠められた。

陰氣な洞窟の中て、國重は法華經の行者としての自分の身を、時々見返つては、お經を讀んだり題目を唱へたりした。寒い冬の日が來て、格子を潜つて雪が舞込んで來るやうな時には、殊に山深い身延の上人の身が案じられた。かと思ふと、自分の出て行つた後て、日興や越後公などは什麽な悲慘な境遇に陷つたのかも知れないと、自分の現在を忘れて同情の涙に暮れることもあつた。その間に自分達が斯うした慘めな生活を送るやうになつたのは、舍兄の彌藤次や瀧泉寺行智が嚴誉と一味になつて、頻りに管領の後家尼などに泣き付いて讒訴

した結果だと知つて、舍兄の淺間しい料簡の程が如何にも悲しかつた。

その年も暮れて、弘安三年の四月になつて、突然、國重は賴綱の邸宅へ引出されて、死刑に處せられる事になつた。

道々國重は、過去を振顧り現在を瞶めて、微笑んだ。——往昔檀王は阿私仙人に責められて法華經の功德を得られた。上慢の僧侶のために打ちのめされて、不輕菩薩は一乘妙法蓮華經の行者と名乘る事が出來た。今自分は末法濁惡の世に生れて、妙法の五字七字を信ずるために死の洗禮を享けるのてある。生きて短い五十年、自分の華やかな死に依つて、自分自身は永へに懷しい芳香を放つ事てあらう……彼の心の裡には、春のやうな和みがあつた。然共、愈々刑場に着いて、日々信仰を語合つた舍弟や田中次郎に廣野彌太郎などを見出した時には、ほろりとした。

静かに刑場を見渡すと、賴綱は得意氣に床几に腰を掛けてゐる。念佛禪宗な

どの道俗は、黒くなつて竹矢來の外にまで溢れてゐる。四方から集つた群衆は、押合ひ揉合ひ、競合ひ犇合ひ、重合つて、互に鬩ぐ聲、喚く聲、叫ぶ聲は一緒になつて溶けて、海の遠鳴りのやうに、刑場の空を唸つて抑えつけてゐる。

その數知れない鋭い視線は、一樣に哀れに誤られた國重などの上に濺がれた。月にも花にも歌ふべき哀れを持たない國重にも、生死の分水嶺に立つて、死の刹那の悲慘を呪はない譯には行かなかつた。——空間に燦く刄、電光の如く迸しる血汐、……刻々に逼つて來る死の影を思ふては、頸の周圍の何となくむづ痒いのを覺えた。

賴綱は血走つた瞳を見据えて、

『如何に熱原なる愚痴の者共、汝等在家の分齊として愍に宗旨法門の詮議。尤も今我が面前に於て法華經を捨てゝ、念佛申すならばいざ知らず。さもなき時は思ひの儘に者共が息の根斷たん。如何に？』

微笑み乍ら國重は、

『這は理不盡の事を承るものかな。事の起りは腹黑き讒人の僞事、露だも吾等の覺え知らざること。斯くまでに明かなる上からは、粗忽を詫びて勦りもすべきに、何ぞや筋違ひなる改宗沙汰、日來月來日蓮上人の御化導、天下泰平の祈りを進めんとの大慈悲には目もくれず、剩へ種々に呵責み、吾れと吾が國の柱を倒さんとせらるゝ愚さ。吾等に念佛を強いるよりも、鎌倉の御一門こそ念佛禪律等を捨てゝ、國のため人のため、この法華經に歸依せさせ給ふへし。……如何にも法華經は捨て申さず！』

『おのれ憎つくき末期の雜言過言、さまでに命が捨てたくば、望みに任せて息の根止めん。判官は居らぬか、判官は!?』

人垣を搔分けて出たのは、賴綱の愛兒飯沼判官であつた。薄紅の素袍を片袖脱いで、螺鈿の細太刀を佩び乍ら、矢頃の場所へ突立つた。國重などを見ると、

暫時躊躇つたやうであつたが、猛り狂つた頼綱の聲に判官は、小脇に掻込んだ弓を取り直して嫣然した。軈て幾度か足を踏占めた後で、徐ろに引絞つた弓は半圓を畫いて幽かに震つた。松の樹と一緒に十重二十重に縛られた國重は、判官が手尖から眼を離さなかつた。

『いかに國重、かくても念佛申さずや！』

頼綱は罵つた。

『さても執拗き大老殿かな。吾れ一度身命をさゝげし法華經なれば、設し日本國の位を讓らるゝ事あらんとも、父母の頸刎ねらるゝも、如何でかこの法華經をば捨て申すべき。縱ひ頸をば鋸にて引切り、胴をば稜鉾を以て突つき、足には鋧を打つて錐を以て揉むとも、命の通はん程は南無妙法蓮華經々々々々々々と唱へて、唱死に死ぬとの誓ひは吾が日蓮上人の御明訓。あらうれしや今や石に黄金を替ふるの時こそ來れり。いざ射て殺せよかし。吾が肉團は此處刑場の露と消ゆるとも、心の誠は萬代までも消失せじ。最後の梵音耳傾けて聽きもせよ、南無妙法蓮華經！』

『憎くさも憎し彼奴射よ！』

喚きと共に弦を離れた矢は、電の如く閃いて國重が胸先をぐさつと貫いた。紅いの血汐は玉の如く迸つて周圍の人々の衣を染めた。

『南無妙法蓮華經！』

忽ち、國重が聲に連れて死を待つ人々の口から漏れた。

一矢を蒙る毎に國重が血の叫びはすゝ嗄れて行つた。

遂に七本の矢が、薊の如く彼の胸に衝立つた時、その悲壯な叫びは刑場の空を掠めて消えた。

二四

邪宗權門の惡辣な障碍から避け乍らも日興は、決して折伏の手は弛めなかつた。殊に緣深い實相寺に向つて射つ矢は彌々烈しくなつた。その間に彼は、鎌倉の峻烈を極めた悲劇の報に接して非常に惱んだ。法のためとは云へ、純潔な志士を失ふ事の唯事でないのを思ふて、全く自分の不徹底な化導が齎らした悲しむべき結果として、上人へ深重の謝罪をなすべく登山した。

思ひに增して上人の身體は衰弱の色が見えた。寒暖の調節を失した生活、唯だ妙法の外に生存の意義を認めない生活から、當然來るべき結果であるとしたにしても、釋尊の人壽百歲に對する八十歲は、聖人の人壽八十歲に比して行末の甚だ心細いものがあつた。心密かに上人の羸憊に氣付いた日興は、設ひそれが大法のためであつたにしても、餘り遠國へ足を向けるのを氣遣つた。て彼は、暫らく甲斐の一國、殊に身延を中心にして周圍の群生を導びくべく出掛けた。而して止むを得ない事情て、山外に宿を借りるやうな事があつても、二日と山

へ足を入れないやうな事はなかつた。波木井鰍澤秋山と、每日のやうに同じ道を同じ法のために上つたり下つたりした。その間に信徒は素より法弟も數多くなつた。その度每に彼はその時々の變遷を上人に物語つた。上人の老後に取つては、かうして弟子達が何の懈怠の色もなく、日一日と法戰の陣を展開して權宗の陣地を占領して行くのが、心からの法悅を噪るやうてあつた。

何時か弘安四年の秋も過ぎて、又た物凄い冬が廻つて來た。日に增し募る寒さは、常になく上人の肌を刺した。間斷なしに降り積る雪は、軈て川を埋めて谷まで包んだ。

日は藥餌に親しんてゐても、心から病勢が衰へるなどとは、上人は思はれなかつた。俗惡な世の一現象としての死、それは既に上人の心の眼に歷然と映じてゐるやうてはあつても、法弟檀越の志をなみする事が心苦しかつた。て、最も正直に肉に釀す變態を一々指摘して、それに對する溫情を享けられた。

然共、山又山の身延にゐて、肉に對する要求が悉く充される譯もなかつた。翌る五年の九月頃になつては、食事さへも咽喉を通らないやうな事が幾度かであつた。日興を始め法弟檀越の心は急に暗くなつた。

其の期の近いたのを知つた上人は、病褥から日興を呼んて、それとなく死の逼つた事を暗示された。その口から漏れる聲は微かてはあるが、沈痛な餘韻は血管から血管に傳つて、心の絲を引絞つて流れた。

やがて上人は一通の書を日興に渡して、

『既に本門の本尊は現はれ、本門の題目は世に流布すれども、王法未だ佛法に冥せず佛法未だ王法に合せず、從つて事の戒壇未だ建立なき事、云ふてもなは餘りあり嘆きてもなは足らず。予年來心に秘すと雖も、其事を書き付けて留置かずんば、門家の遺弟等定んて無慈悲の讒言を加ふべし。其後は悔ゆとも叶ふまじ、されば御房に對し書置き候。一見の後祕して他見あるべからず、口外も亦た詮なし、祕すべし祕すべし。』

日興は愼ましく押し戴いて、徐ろにそれを讀むと、

日蓮一期の弘法白蓮阿闍梨日興に之を付囑す。本門弘通の大導師たるべきなり。國主この法を立てらるれば、富士山本門寺に戒壇を建立せらるべきなり。時を待つべきのみ。事の戒法と謂ふは是なり。就中我が門弟等この狀を守るべきなり。

弘安五年壬午九月　日　　日蓮

血豚次第日蓮日興

彼は目讀しながら涙の泌むのを抑へる事が出來なかつた。喜びの涙と悲しみの涙とは一時に湧いた。

二五

既に亡き後に心安くなつた上人は、法弟信徒の請ひに任せて常陸の湯へと決心された。

實長から贈つて來た栗毛の馬に跨つて、上人は靜かに大衆に伴はれ乍ら身延の山を下られた。

振顧つて見ると、身延の山は九年の昔と些の變りもない。當だ時が持ち來した變化は自分の周圍のみてある。三度國を憂ふるの餘り諫めて用ひられないて、沈默の裡に世の覺醒を促さうとして此山に隱れた時には、上人の身邊に追き纒ふものとては、ほんの二三の法弟檀越に過ぎなかつた。而も荆棘又た荆棘の山には、何處を住家として居るべき所もなかつた。草の蔓を截き切り引き遁つて八重葎を踏み擢き〳〵母國の空を偲ぶべく登つた嶺……上人は當時をその儘に深い追憶に驅られて、昔が今か、今が昔か霎時は意識を失はれた。

上人に取つて、この身延から別れると云ふ事が、如何にも痛いのは誰の眼にも分つた。

下山鰍澤曾根を通つて、足柄山を越えて、池上宗仲の館に着かれたのは、その月の十八日の午頃てあつた。

翌日病をつとめて筆を執つて、波木井へ宛てゝ書かれた。

『……日本國にそこばく持ち扱ひて候身を、九ヶ年まで御歸依候ぬる御志申すばかりなく候へども、何處にて死に候とも墓をば身延の澤にせさせ候べく候……』

この邊りを書かれる時には、穗先は微かに顫えた。自己の死を思ふ切なさから出た戰慄ではなくて、身延の土地そのものに深い心からの悲さが包み切れなかつたからてあつた。八年の住家靈山を離れて跋提河の畔に滅を示された釋尊に思ひ較べて、身延九年の生活から多摩川の邊りに死を待つ事が、上人に取つては最も相應しい現象てあるやうに思はれた。身延の山が世の何ものにも代へ難い土地てあると共に、池上そのものにも捨て難い所があつた。

その病狀や、眉間に仄見える死の覺悟に氣付いた法弟檀越の心はいよ〳〵曇つた。

陰氣な滅入るやうな日が、幾日か續いた。

偶々晴れた春日和の二十五日であつた。上人は靜かに病褥から起つて、大衆のために『立正安國論』を講じられた。聲こそ細つてはゐても、言々句々の間に犯し難い餘韻が漂つてゐた。聲が消え行くと同時に、死の黒幕が切り落されるのかと思はれる程な、衰頽した體軀も、立正安國の實現を熱叫する時には、全身に血が漲つて一語々々に骨があるやうに思はれた。

月を越えてから、病は日を追ふて進んだ。

それでも折に觸れては法門を談したり、遺物を分配したりされた。而して日昭日朗日興日向日頂日持の六人を上足に定めて、最後の諭告を與へられた。

十二日の夕暮から、病勢は急に革まつた。

法弟檀越等は枕邊に近く集つて、手を下すべき術もなく固唾を嚥んで看守つた。これと云ふ苦痛の色は認められないけれども、刻一刻と血汐の引いて行くのが見透されるやうてあつた。

悲哀と絶望の氣分が室内に漲つた。

薔薇色の曙に微かな望みを繫ぎ乍ら、人々は僅かに慰めやうとした。然共、憂愁の念は益々増長するばかりてあつた。死の刹那を瞪めた經驗が喚る印象や記憶……それ等の混淆になつた斷片が、總ての人々の頭腦の中を徂徠した。額には氣味の惡い程汗が滲み出した。

その夜の黎明、大衆が壽量品の半ば頃を讀み行く時、上人はその絶大な力と光りと響きとを、暫し此の現象界から隱された。

何時の間にか戸外は、荒まじい暴風雨に變つてゐた。骨身に泌みる風が樹立を掠めて飈々と嘯く、そして有ゆる罅隙や裂口を狙つて物凄く吼えた。

二六

涙の裡に遺骨を身延に葬つた六上足は、別々に居處を構へて喪に服した。日興は醍醐谷に常在院を建てゝ不斷の法味を供へた。四條金吾は鎌倉の奉仕を止めて、御墓の側の端場坊て死を待つ覺悟をした。

明けても暮れても身延の山には、重い物哀しい雲が垂罩めてゐた。

悲しみの月と日は經つた。百ケ日の法會も嚴かに終つた。六上足は各自に自分の布教地域へ歸へるために、上人の遺命に任せて、月々交代して御廟を守る事にした。日興のみは、身延に常在して總ての事を所理するやうになつた。

春と夏とは踵を追ふて去つて、軈て一周忌が來た。

法弟檀越は四方から集つて來た。嚴かな山は徒らに昔の俤を語るけれども、上人の英姿は永へに見る事が出來ない。互に言葉もなく堂内に跪いた。蕭やかな法會が總ると、大衆は一人減り二人減りして、再びより已上の寂寥が山を包んだ。

骨身に嚙みつく寂寥を癒やすために日興は、谿間の清水を汲んでは閼伽に代へ、荊棘の中から花を折り取つては廟前に供へた。そして暇々には法弟檀越のために大法を講じた。亡き上人を慰むるためには、本門壽量の底深く祕められた妙法五字を、四海に廣布するより外に道のない事に深く心を注いで、些の私心も雜へないで、只管にその時の到るのを急いだ。

竈の陰に蟋蟀が啼く時節となつて、棗も赤く熟し、柿の澁も九分まで上つた、寂しい秋は復た遣つて來た。然共、日昭や日朗は池上で上人の三周忌を勤めるとの事で、誰も登つて來なかつた。斯うして去年よりも一昨年よりも、一層の寂寥を齎らして今年の十月は廻つて來た。

寂しい法會を營んで、日興は甲駿から集つて來た人々のために法義を說いた。

日目はその日、奥州で敎化した日尊を日興に引き合はした。切めてもの心遣りに日興は、弟子を集めて、それが什麽な些細な事であつたにしても、先師上人の遺旨に悖るやうな事があつてはならないと深く戒しめた。
昨日の夢のやうに思はれた上人の入滅も、何時か四年の昔に指を折らねばならぬやうになつた。その間に多年心に懸つてゐた實相寺も、嚴譽などの惡事が曝露して、本化に歸服した事を日秀から知らせて來た。
再び會ふ事が出來ないのかと氣遣つてゐた日昭、日朗などが、突然、常になく早く十月の初めに登つて來た。久濶振りに會つた六上足は悲しい裡にも心樂しいものがあつた。然共、それはほんの暫らくであつた。法會が濟むと、實長は、定住のない靈地が日に〳〵荒廢する事を嘆いて、輪番の制規を廢止するやうに主張した。六上足は一齊に顔を背けて默した。が、間もなく日昭は、實長の位置と性格とを思ふて、同意をした。日朗日向なども次いで贊同しない譯には行かなかつた。然共、然共、時間空間を絕して上人の言葉を尊重した日興は、獨り口を噤ぐんで語らない。再び三度實長はその意見を促した。『先師の遺旨畏れあり!』とのみて、其外を言はなかつた。實長も心竊かに喜ばなかつた。日昭日朗などは、能く日興の心の中を洞察してはゐたが、避け難い出來事として心ならずも諾した。
その日はそれ切りて互に別れた。
其後、實長は私かに自分の主張の歩を着々と進めて行つた。老軀の日昭はその任てない、日朗は長興長榮兩山の職にあるとの理由て、實長は日向を推して身延の常在主に望んだ。謙讓な日向は幾度か辭したが、日昭や日朗の勸めもあるので、氣を兼ね乍らその職に就いた。
この事があつてから日興は日夜樂しまなかつた。縱ひ檀越として牛耳を握つてゐる實長にしても、よし棲神の靈地を喜捨した彼にしても、上人の遺勅を蔑

ろにする罪は、日興が最も惡み且つ呪ふ所であつた。

斯うして日興と實長との間には、睨合ひのやうな月と日が長く續いた。

その間に何時か、『心に二つまし／＼て信心だに弱く候はゞ、峯の石の谷へ轉び空の雨の大地へ落つると思召せ』と、上人が、臨終の際に心の底を見透して、亡き後の世まで氣遣はれたやうに、實長の心は漸次分裂し始めた。

遂に念佛の供養までもするやうになつた。日向は心密かに惱んだ。それとなく、注意もした。腫物にでも觸るやうに、譏彈もした。然共、これぞと云ふ効力があつたやうにも思はれなかつた。とは云つても、その時と場所とを考へては、さう／＼頭ごなしに責めつける譯にも行かなかつた。仍且、實長の隔世を待つより外に途がないやうに思はれた。

これを聞き知つた日興は立つても坐つてもゐられなかつた。幾度かその罪を詰つて見たがもう駄目であつた。

彼の絶望はその極點に達した。設ひ輪番廢止の事は許したにしても、謗法の罪は天地を覆しても許す事の出來ない明かな事實である。これさへも許すならば、上人の主義主張は、最早この世から葬り去られたと同樣である。實長の心の翻へるまでは、この地を踏むまいと、堅い臍を決めた。

二七

起伏した國境の連山の上へ、重たい灰色の靄が澱み出して、山の肌が紫水晶のやうに光り出した。それから毎日寒い／＼北風が吹いた。家々は風に吹き洗はれる度に、ます／＼光澤のない錆色に變つて行つた。がた／＼と齒を搗合せるやうな音を立てゝ、深く鎖した戸障子が啜り泣いた。葉の落盡した黒い樹木は鞭を振廻はすやうな悲鳴を揚げて、乾いて捲れ上つた落葉はころ／＼と地上を驅けずり廻つて、軈ては閉ざゝれた家の戸を氣味悪く敲いて、言ひ知らぬ憂

鬱に沈んだ人々の心を脅かした……恁うして身延の澤に、正應元年の暗い冬が來た。

數奇な運命……去り難い靈地を去らねばならぬ今の日興に取つては、廟所より外に訣別の詞を殘す所もなかつた。

百舌鳥も啼かない靜かな夕である。

彼は墓前に立つて、徐ろに自分の來し方行末を幻に浮べて見た。

『南無日蓮大上人！』

藪陰はもう闇の色に褁まれて、濕つた墓土の香りは、無限の懷しみを以て彼の五體中に浸込んだ。彼は最早何物をも考へる餘裕を持たなかつた。

日興が下山の日は、取分けもの暗い悲しげな日であつた。その日は未だ人々の眼覺めない中に、狂人のやうな風は死んだ。その代り地を踘めるやうに、重疊した雲が腹を垂らした。而して何の物音もない張り切れるやうな大きな靜寂が、天地の間に孕まれてゐた。

『身延山を罷出候は、面目なさ本意なさ申し盡し難く候へども、打還へし案じ候へば、何處にても上人の御義を相繼ぎ進らせて、世に立て候はん事こそ詮にて候へ……』

と、原殿に書殘して日興は、進まぬ足を踏み占め乍ら身延山を下つて行つた。日目日華日秀を始め、父の遺骨を携へて登つて來てゐた日滿も從つた。實長のために私かに苦言を送つた四條金吾も後を追ふた。

傷ましい斷念と微かな希望とに、足の運びは兎角縺れ勝ちであつた。黒黝んだ杉の林を潜り拔けると、淡い翠色に透明つた身延川が、寒むさうに皺を寄せて白泡を吹き乍ら、忙しさうに走つて行く。その流水の音が、闇の底からでも湧くやうに、意識に上つて來た。嗄れて行くその囁ぎは、噓欷くかの如くに、追憶の涙を誘つた。その哀調を帶びた音律が、周圍の入り亂れた雜音を壓倒し

た時、眼に見えぬ程な細い霧雨のやうな潤（うるほ）ひが、彼の腸（はらわた）の底まで蕭（しめ）やかに泌み渡る。軈て、全身の血汐が平靜に流れて、肉と云ふ肉を醇化（とろか）し心の咽び泣きを宥めて來ると、彼は、肉もなく靈もなく、唯だ冴え切つた初冬の霜空に、その儘溶けて行くやうな神祕な感に打たれた。

自分の誠忠（まごゝろ）が足りなかつたのか、それとも惡魔が唆る不吉か、實長の心を飜（ひるがへ）す事の出來なかつた彼は、大井の家で年を越す事にした。

『日圓は故上人の御弟子にて候なり。申せば老僧達も同胞にてこそわたらせ給候に、無道に師匠の御墓をすて參せてとがなき日圓を御不審候はんは、いかで佛智にもあひかなはせ給ひ候べき。御經に功を入り參せ候て、師匠の御あはれみをかふむり候御事、おそらくはおとりまゐらせず候。前後差別はかくこそ候へ……』

この書状を實長から送られて日興は、涙乍らに駿州へ下る事にした。

咡（さゝや）ぐ溪川の聲にも、遷り變つて行く山の翠りにも、昔と異つた一種の哀調が籠つてゐるやうに思はれた。一刻々々と身延から遠ざかつて行くのが、何か知ら淋しい事に思はれた。總てが現實から遠ざかつたやうに、總てが何だが夢のやうに、判然（はつきり）しない感じの中にも、彼の頭腦（たま）には色々な思ひが往來した。

二八

餘り健（すぐ）れない氣分で日興は河合へ着いた。そして一室に閉籠つて、人目を避けるやうに〳〵としてゐた。

訣（わか）れて間もない上人は誤られ、今又た自分が疎（うと）まれるやうになつたのを、彼は心から悲んだ。實際彼は苦しんだ。

自分の生きて行く道！日夜彼は考に沈んだ。――唯だ世の人々を救ひたいから生きると云ふ外に、自己生存の理由を見出せない。その救ふと云ふ事は、追

ひ究めれば、生きて人々の中に、自分の精神生活を理解させて、互に享樂したいと云ふ努力ではあるまいか。して見れば、飽くまでも他からの誤解を釋かねばならない。それがためには、自分の骨身に喰ひ入る苦痛と、他人の全身を赤黒く燒き爛らす憤懣とを豫期せなければならない。そうしてその募つて行く憤懣を亡ぼして行く事が、即ちそれを快く受けて行く事が、救ひの第一義ではなからうか。併し、燃え上る憤懣の焔の中で、冷たい理性の水が果して自分自身の本性を實現し得るものであらうか。憤懣を宥めやうとする理性の囁ぎは、却つて彼自身を威嚇し分裂させる事になりはすまいか。とすれば、救ひの眞意を傷ける矛盾に陷らねばならない。

一體口から耳へと傳へらるゝ言葉は、陳腐な符號に過ぎない。幾度か繰返へされた言葉が、他人の全身心を動かさう筈もない。肉と肉とを接觸させるためには、言葉は尊い。さうした求めを充し得る日に着くまでの道程には、言葉の

影に誘引を見るけれども、その接觸を得た後て、心と心とが融合し溶和するためには、寧ろその言葉は恐しい爆藥である。殊に盲ひたる心に向つて射たれる言葉位危險なものはない。たゞ心と心との醱酵は、自然の儘に流れを凝視めるより仕方がないではなからうか。とすれば、この上實長のために送る苦言はなくとも、自分の進むべき道が狹められたのでもないではないか。

それにしても日昭日朗などの今日此頃は什麼であらう。先師の墓を後にした自分を、はしたない者と蔑しんでゐるであらうか。正義のために進んで犧牲となつた自分に、なほ哀れな名を附するであらうか。昨日の自分と今日の自分との間には、些の蟠まりもないのであるが、その時を異にし處を異にした今の自分が、或は彼等の眼に異樣に映ずるかも知れない。然共、等しく上人の眼に映じた彼等と自分との間には、永へに墻壁のない筈である。若しその間に溝渠のあるのを見出す者があつたとすれば、それは自分の罪でもなければ、素より彼

等の罪でもない。但だそれは見る人の眼が濁つてゐるのであつて、幻影に過ぎない。今斯うして互に場所を異にしてゐるのは、如何にも先師の聖跡を汚す恐れはあるが、實長に近づけば近づく程それ丈け多く神聖な山を汚瀆する事になる。たゞ實長の狂烈な火の鎮まる時を待つより途がない。日向が自然の教化に委ねて、飽くまでも不言の裡に誤解を釋くのが、自分の生きて行くべき道である。——

日興は切實に惱んだ。惱んで惱み貫いた揚句、遂に彼は堅い〳〵決心に逢着した。

その日から彼は、前にも増した熱烈な傳道を始めた。毎日々々河合の近傍を大呼し乍ら、弟子と共に歩いた。

何時からともなく、暗い陰の薄れて行つた日興を見て、四條金吾は胸を撫下した。而して實長との間を温めやうとしたが、深い顧慮のある日興は然り氣なく斷つた。

河合に日興のゐる事を知つた上野の地頭時光は、頻りに彼が上野へ移住するのを熱望した。で、彼は法弟を連れて其處へ移つた。

時光は大石の原を割いて日興に捧げた、而して其處へ一つの堂宇を建てゝ妙法の道場と定めた。

かうして不撓な大法宣傳の結果は、一丸となつて此に現はれた。近郷からは毎日信徒が、道場目懸けて集つて來た。師弟は交る〳〵僞らない心の叫びを吐いた。

日興は此處で數年を過ごした。

その間に彼は、時々遠出をして説法をする事もあつた。

二九

ある麗かな彌生の午後であつた。日興は日目日華の二人を連れて野外へ出た。温い光線は柔かく射して宛ら夢のやうに、彼はうつら／＼と美しい黄な幻を趁ひ乍ら、廣茫とした重須の丘へ登つた。

憤然とした兩眼を上げて高く仰ぐと、澄み切つた空は濃紫色に溶けて、純白な雲がふつはりと浮いてゐる。その間を嶄然として貫く男性的な山は、その頂を白雪に纏ふてゐる。その綠な襞は緩やかに遠く流れて、霞の裡に消えて行く。かと思ふと、活々した深碧の駿河の海は眼下に展けて、伊豆の半島は波浪の間に薄蒼く漂ふて見える。灰色に煙つた加島熱原邊りの家々は、平和と愛とに滿ち溢れてゐるやう……美か善か眞か、この刹那彼の心の裡に、瑠璃色の崇高な感情の花が咲いた。

『靈山淨土にも似たらん、最勝の地を尋ねて戒壇を建立すべきもの歟……富士山本門寺！』

口に出しかけて止めた。

一度この悠大な天地を俯仰した日興の心の奥深くには、この絶景が黑痣のやうに滲んで了つた。先師の遺業はこの美妙な裾野に開敷せなければならない。教そのものが釋尊一代の諸説に卓越してゐるからには、その戒壇も世の總てを凌駕するものでなければならない。理の圓戒叡山は三千坊に圍繞されてゐるからには、本門事の戒壇のためには少くとも六萬坊の土地を要する。富士が群巒を統一すると同樣に、本門の妙戒は世の諸ゆる麤戒を綜合統一して、开處に人心の糾合を需めなければならない。國王大臣も共に首垂れて、靈妙な威に自己を忘れ得る程の處でなくてはならないと、考へて來ていよ／＼重須の丘が忘れ難いものとなつた。

この純潔な榮ある企を心私かに感得した地主の石川孫三郎は、その土地の全部を擧げて日興に委ねて、共に成業の完璧を期した。

その日から、先づ戒壇の基礎として、堂宇を建設すべき位置を選定するために、法弟檀越を伴つて日興は、重須の丘へと急いだ。誰云ふともなく、『萬坊ヶ原萬坊ヶ原』と口々に言ひ出した。

彼方此方と彷徨ふてゐる間に、何時か富士の麓を蒼黝く彩つた松や杉檜の森に這入つた。幾百年かを經た幹は肥え樹は伸びて、針葉が毿々として晝なほ暗い薫やかな氣分に滿ちてゐるのが、殊更日興の心を嗾つた。樹の根を踏み越え〳〵幹を撫て、樹皮を摩つて辿り行く彼の足下には、雜草が次第に深く埋れて、もう逕も見分けがつかない程蕁麻が倒れ伏し、八重葎が混亂れて立ち入る行手を遮り、足踏みもならぬまでに生ひ繁つてゐる。彼は草の蔓を敲き切り引き退つて八重葎を踏み擢き〳〵幹と幹との間を潜つて、奥へ〳〵と登つて行つた。

傾いた日影は斜に綠な葉間に篩ひ越されて、紫立つた光線を幾條となく樹間に投げてゐる。樹脂臭い風が吹く度に梢がざわ〳〵と搖れ動いて、青草のもれ上

つた大地の其處此處に、斑な光りが縞のやうに織り零れてゐた。彼も弟子も信徒も皆な恍惚と、周圍の光景にすつかり魅せられて了つた。

不圖、日興は彼方の松の幹に白い影が閃づいたので、愕然として立止つた。熟々見ると其處は齒拔のやうに森が疎らになつてゐて、翠り滴る松の根に、夕日の惠みを享けた白蓮が微笑むかの如く立つてゐた。『日輪の餘光に浴せる白蓮……日蓮白蓮！』と、彼はこの心の呟ぎを聞いた。

『此地こそ本門戒壇の敷地にて候はずや？』

日興は云へ知れぬ喜びを包み乍ら振顧つた。

人々は口を合せて讃美の聲を放つた。

彼等は全身の歡喜を纏れる舌に集中めて鎭地の讀經を上げた。冴え切つたその聲は、森の靜寂を搖り覺まして、頓てしんと呟ぎのやうに木精に死んだ。

暫くして日興は幵處から下り始めた。

立並ぶ樹間を越して、西の空は眞赫な血を塗つたやうに燃えてゐたが、森の繁みからは早や何時の間にか薄暗の色が差迫つて來てゐた。と、何處からともなく、朗かな鶯の聲が時遲れ乍らに木の間を縫ふて流れて來た。

互に顔見合せてこの美妙な暗示に醉ふた。

其翌日から、この森の中で鋸の音が雨のやうに聞え出した。

工事は夜を日に繼いで進んだ。

永仁六年になつて、數棟の支坊に圍まれた大きい寺院が出來上つた。

萬年の行末までも色も變らぬ妙法の七字を暗示するために、日興は、堂前に自ら七本の杉を植ゑた。而して上人の遺勅に任せて、『富士山本門寺』と號して、開堂の供養を最も嚴かに行つた。

三〇

荘嚴な儀式が濟むと次第々々に大衆は散つて、新しい木の香が堂内に漲つた。喜悅に充ちて歸へる人々を見送り乍ら、日興は堂前に立つてゐた。

何時しか匍ひ逼つた闇が、總ての物象を裹み匿して、黒ずんだ遠景の中に駿河の海が、ほの錆びた銀盤のやうに浮き澱んで見えた。と、幵處に何時までも首垂れて、歸らうともしない二人の女のゐるのに氣付いた。暫らくすると二人は静かに立つて日興の膝近く寄つて懇懃に禮をした。よく見ると闇にもそれは、池上で知合つた日妙に娘の妙國である事が解つた。然共、下總にあるべきその二人が、故鄕とは云へ此處にゐると云ふ事が、不思議でならなかつた。

で、日興は二人を居室に伴つて、その不審を訊ねた。

日妙は巨波のやうに顫え戰ぐ身體を、凝乎と疊に押据ゑて涙と共に語つた。

——十九の春重須の邑主であつた定時に嫁いて、二十五の冬二男一女を殘して夫に死なれてから三十年の間を、日妙は物足らない淋しい生活で送つた。日

蓮上人に心を傾けてからの彼女の頭腦には、身を搖す振るやうな判然した悲哀は湧いた例はないが、少くとも生家の荒れ果てた衰落の跡に、昔の名殘を偲んで泣くだけの朦朧げな女らしい嘆きはあつた。

寡婦と云ふ牢獄に青春の血湧き立つ時代から押し籠められて、男と云ふものをば、靄を隔てゝ見る春の月のやうに、見過ごさなければならなくなつた彼女は、三人の子供を懷いてまんじりともせない夜を、詫びしい遣瀨ない氣持て泌々と泣いた。

三十の暮、彼女は知邊の世話で、富木胤繼の後妻として片付く事になつた。其處て日蓮上人の敎に跪くやうになつてから、始めて世の中の人となつたやうな氣持て、去年の九月まて、若い女のやうに、心臟の血を強く波打たせ乍ら樂しい日に生きて來た。然共、その樂しいと思つた長い月日も、今から考へると、宛然白蟻が木を食ひ滅らすやうに、家庭の溫味がぢり〳〵と發散しつゝあつた

のである。そして三人の子供を連れて嫁ぐと云ふ事は、餘りに考へのない仕打てあつた。冷たい風が何時か墻壁の如くに、夫との間に吹き荒ぶてあらうと云ふ事に、心付かなかつたのが情なかつた。

二人の男の子を上人と日向に託して、殘つた娘の妙國を連れて、下總を出て來る時にはほろりとした。淋しい寡婦の生活から、賑やかな世間を戀ひ慕つた時のやうな感想が湧いて、再び昔の孤獨の生活に這入らうとする淋しさの念が、ふと心の中に閃めいたからであつた。そしてその閃きが漸次大きく擴つて行つて、凝固つた信念の火さへもふつと消えかけた。

追懷の丘の上に登つて眼を見張ると、幾度か自分の足を惱ました路や、手を傷けた茨も森も幻影の中に溶け込んで、一様に心を魅する景色となつた。然共、再び自分を孤獨の位置に置いて眺めた時、彼女は今更のやうに上人の敎が戀しくなつて、靜乎としてゐられないやうに、心臟の血が逆行するのを覺えた。而

して、『南無妙法蓮華經！』と、唱へる自分の聲に可懷しさが新たに湧いて、思はず嫣然した事などを細々と物語つて、

『命運盡きずして今日の盛典に與かる嬉しさ……』

と口を結んだ日妙の顏は、ぽいんのりと上氣してゐた。日興は何時までも〳〵默してゐた。

三一

已にその土地は定まつた。末法の溷濁を癈除して、純潔な群生の心に統一を與へ、慰安を授くべき土地は定まつた。日目を大石寺の別當として、自ら此本門寺に住む事にした。最早この上は一日も早く、天下の萬民をして一佛乘の妙法に向はせなければならない。それが爲には、亡き後の世を飾る法弟の信念と明智に待つより外にない。であるから彼は、布敎の傍ら餘暇さへあれば、深信の

檀越や法弟のために甚深の奧義を口述した。

それは晩秋の日暮である。

夕映の雲間を逆に流れてゐた弱い光線が、次第々々に消えて行くと、何處ともなく物足りないやうな黃昏の色が漂つて來て、小鳥は呟き乍ら塒に歸つて來た。すると靜かに重須の森は闇の底に沈んで行くのであつた。

軈て蕭やかな鐘が木々の梢に染み渡ると、日興は、大講堂の獅子座に登つて、徐ろに註法華經の講演を始めた。法弟や熾烈な信念に燃えてゐる上野石川日妙などは、咽頭から衝き上げて來るやうな、焦躁しい期待に身體を震はせ乍ら、兩眼に異樣な輝きを漲らせて聞いてゐる。白い胸の皮一重底に、湧き溢れる絳絹裏よりも赤い熱情を包み乍ら、凝乎と聞蕩れる妙國もゐた。

講演は極めて嚴肅に重々しい氣分の裡に進んだ。

講堂の中が明るくなるに從つて、周圍の總ての物象は、洞穴が出來たやうに

悉く闇の中に眞黒くなつて、少しも殘らぬやうに晝の光りを吸ひ盡されて了つた。

間もなく、盲目の世界が撥と眼を見開いたやうに、玉のやうな月が不意にその姿を現はすと、搖々と光る波間から鐘樓堂が浮繪のやうに影つた。その透明つた月光が軟かく建物や樹木を撫てゝ、美妙な生命を吹き込むと、虫は喜びの歌を唄ひ始めた。折々さゝゝやめく葉擦の音は、不規則な波紋を押出して鐘樓の中に打寄せて、釣鐘に共鳴しては悲しげな曲調を刻んだ。その度每に燈火は狼狽て身體を戰がせた。

倏ち、狂人のやうな凩が、四邊の樹木を搖す振つて、零れ散る梨の病葉を掴むと、巴のやうに渦卷き乍ら、開放された講堂の中へ躍込んで來た。危く燈火は盜まれかけた。

然共、一字一句も忽せならぬ祕法に、緇素諸共些の搖ぎも見せなかつた。

が、突然である、日興の聲は礑と止まつた。そして靜かに註法華經を閉ぢて口を噤んで了つた。

夢から急に喚起されたやうに、大衆は互に顧み乍らこの不意な謎に對して惑ふた。

やがて日興は潤んだ眼を瞰張つて、嚴かに、

『日尊！』

聲は流石に顫えを帶びてゐた。

『はい！』と叫んで日尊は、兩手を突いて首垂れた。

『今宵限りこの日興は師弟の緣を斷ちたるぞ！』

『はつ！』と、口元まで出たが淚で咽喉が塞つた。

一坐は水を打つたやうに闃然として、誰一人口を切る者もなかつたが、軈て時光は恐る〱、

『こは寢耳に水の御呵責、如何なる仔細あつてか日尊の御房をば勘當召さるや、この時光如何にも合點が參らぬ。』

『されば、日尊を勘當なせしは餘の儀にあらず、大法宣傳及びもなければ。』

『そは又た何故に？……天晴れ不惜身命の導師と仰ぎしに。』

『日來賴みし事も水の泡、三世の契りとは云へ、餘りに果敢なき今宵の不仕末、眞實不惜身命の者ならば、縱ひ火の雨水の雨、降ることありとも目も昊れず、只管大法に心を碎くべきに、いゝよしなき落葉に心を奪はれ、美妙の法義を外にする日尊如き迂濶者に、弟子と呼び師匠と呼ばるゝさへ心苦し。不信と云はふか上慢と云はふか、見下げ果てたるその性根。さるにても、それとは知らず今日まで、憚り多き大法の筵にかゝる不所存者を許せし事、日興が償ひ難き一生の不覺。先師上人に對し奉り、申し開く言葉とてもない今宵の仕儀。もしも辨阿闍梨などの耳に入り、日興が弟子は云云と言はれん時の心苦しさ。思ひ廻らすさへ腸を裂かるゝ想ひ。……して一同にも能く〳〵聽かれよ。日來月來進め參らする故上人の御敎訓、眼前拜し參らせて、色心二法に泌み渡る先師の傍、時には血も涙もお坐さぬかと疑はるゝ迄の嚴しき掟。指屈むれば今は二十年の昔。上人身延へ御退棲の砌、内房の尼御前が上人懷しさの餘り、八十餘歳の老いの身を遙々登つた甲斐もなく、八幡參詣の途上とあつては見參ならぬとの嚴命、尼御前は賴みの綱も切れ果てゝ、泣く〳〵下つたその姿！未だに消えやらぬこの日興が追懷、却々斯程の事にて上人の御敎訓の盡きる筈もなし。それを何ぞや日尊は、その時來つて散る病葉に、千萬却にも遇ひ難き大法を疎かにする、云はうやうなき亂心者、最早師弟の緣は今宵限、この重須の土地にも用はなし、何處なりとも足に任せて下るべし。……あゝいゝよしなき魔事に汚されて、如說の修行を怠りし。一會の大乘齋め〳〵弛む心なく、彌々大信力を發して寂光の寶刹を期せられよ。南無妙法蓮華經！』

やがて、物思はしげな顔で日興は高座から退いた。

『御師匠樣！』

日尊は呼び掛けた。然共、周圍を疑懼する彼の舌は、輕石のやうに乾き硬ばつて、す嗄れた聲は口の中で消えて了つた。

再び彼が呼ばうとした時には、既に日興の姿は奥の闇に消えてゐた。忽ち、彼の呼吸は怖しく切迫して、血管を溢れて冷汗が彼の全身をだく／＼と流れた。

堂内は森閑として靜かに夜は更けてゐた。思ひ出したやうに時々吹き込む風は何時か霜を含んでゐた。

三

霜の激しい黎明、狹霧の底に眠つた常盤木の森に眩しい光線が射すと、驚き易い秋晴の空は瑞々しい輝きを旺に降り濺ぐ。群青に圓く豐かに展べられた穹

窿の下に、總ての物象は茫然とした意識の眼を開いて、美しい靜謐に耳を澄してゐる。

重須の森の五重の塔、其處まで來ると日尊は、死人のやうにぐつたりと腰を下した。

霜に冴えた暗綠色の常盤木に交つて、火のやうに赤く燃え立つた紅葉の葉は、間斷なしに舞ひ落ちてゐる。彼は失神したやうに、灰色な瞳を据ゑてそれに見入つた。四邊には何の音もない。痛切な沈默は、石像のやうに腰掛けた彼を取卷いて、落付かない彼の心を强いて瞑想の谷に導かうとする。――濕つた芝草の不快の感じも忘れて、神祕な囁語に耳を傾けた時、彼は唯だ呵責の槌の響きと闇黑な惡感を覺ゆるだけであつた。刻々に離れて行く光明の世界と彼とを結付ける努力は、既に彼には需められないやうに思はれる。罪の重荷に喘ぎ乍ら、疲れた足を羞殺の山から山へと引摺つて行く破戒の僧は、軈て其墮獄の一齣を

展開するのを什麼する事も出來ない樣に感じられた。そして赭い坩堝のやうな無間の腭の底に投げ入れられた彼の髑髏が、とろ〳〵と溶け行く刹那を待つより外に道がない。奔馬のやうに妙法の愛着に燃え狂ふてゐた滿腔の熱血は、日向に切棄てられた筍のやうに縮れた血管の中に、青銹の如く焦着くまでに乾涸びて、次第に湧出づる冷たい哀愁の流れは、繭から吐出す絲が籰子に絡み付くやうに、涙ぐんだ彼の心の周圍を緊縮めて、遂に死の斷念の底に沈澱させて了つた。彼は今有ゆる慾望を捨て、信念の絆を斷ち、斷末魔の苦惱さへも忘れて、白熊が氷山を戀ひ慕つて獸檻に藻掻くやうに、潰れた自分の形骸から脫れやうとする激情の、亢奮するのを禁じ得なかつた。

然共、再び彼の心が眼醒めた時、潰れた形骸を燒盡した後に、傷づき倒れた靈魂の慘しき悲鳴を聞かないのを、保證する丈けの確信が彼にはなかつた。生木を割くが如き不自然な形骸の破產が、靈魂に刻まれた祕密の借財を辨償し得

る理由を探すためには、餘りに彼の靈魂の叫びの大きいのを覺えた。肉の分離から釀す溷濁した血汐と咽せ返へる臭氣とは、やがて顫え戰ぐ靈魂の瞳を屠り、路傍に投付けて、その哀れな姿を嘲る愚かさを、恐れない譯には行かなかつた。思慮もない肉の前に跪いて、その命ずるが儘に色彩を裝ひ、誇りを塗つて徒らに笑ひ、徒らに泣き自己を亡ぼし投出して平和を叫ぶ。その亡ぼしたと思ふ後に、透かせば困憊した靈魂の縱橫に傷付く醜體を什麼しても沒却し得ないのを僞る事が出來なかつた。痛手に惱む靈魂のために、等しき圓周の如くに重合つて、その思ひの儘に勦つて其處に始めて死に優る生の意義がある――

『靈魂のために！』

彼は彈機のやうに跳ね起きた。

薄墨の衣の袖を絞つて、凍えた手て草鞋の紐を引締めると、彼はいそ〳〵と石段を下りた。赤と黃色な落葉は一面に散り敷いて、痛々しい銀色の霜は、透

徹した朝の光りにきら〳〵と輝く。足の甲を埋めるまでに堆高くなつた霜柱を、蹂躙り乍ら彼は急いで村の方へ下つて行つた。

飄然とその姿を隱した日尊の行衛は、翌年の花が散り夏が逝いても知れなかつた。

併し、彼の心の奥深く烙印されて、忘れやうとして忘れる事の出來ない思出多い秋は再び廻つて來た。人々の心を醉はせる鶴林會は重須の森の夜を燒き焦した。その十二日の日が沈んでからであつた。押合ひ犇合ふ參籠の群聚に紛れて日尊は、ひよつくりその姿を御堂の前に現はした。そして誰人からも咎めらるゝ事もなく、その夜の裡に消えた。かくして彼が此處に現はれ彼處に沒えた事を語り得るのは、彼自身を除いて何人も權利を持たなかつた。

月日は流れた。二年三年四年……と年は暮れた。而も十月十二日の夜の來る毎に、必ず默々と首垂れて山門を潛つて行く日尊の姿が見られた。然共、『さては……』と驚き訊ねるやうな人々の眼からは、何時も避けてゐた。

設ひ其處に慕はしい師匠は居ないにせよ、忘れられぬ人々を瞥見るためではないにもせよ、月夜にせよ、闇夜にせよ、彼は離山已來一年としてこの夜にこの御堂を訪づれる事を忘れなかつた。

『何故に御堂へは登らせられずや？』

彼が竊かに堂下に忍ぶ時、偶う見知らぬ人が慟るやうに訊く事があつても、彼は瞭然と得心の行くやうに、其譯を話して聞かす事の出來ないのが如何にも痛らかつた。――仍且誰人にも解けない謎てあつた。

三

正安四年は乾元元年と改つたその二月の頃であつた。突然、日頂の姿が重須の森に見出された。

日頂は此處へ來るまでには隨分思ひ惱んだ。――白旗を揚げるかさもなくば、敵に背後を見せねばならぬ偶々開いた法戰に、凱歌を擧げたその足で、時遲れてはと彼れが驅せつけた先師三周忌の法會は、既に終りを告げてゐた。その償ひ難い罪過は養父日常（富木胤繼）の勘氣となつて現はれた。眞間と中山は鼻目の間にあり乍ら、月日を外に親子は、互に曇り勝ちな氣分でその日を送らねばならなくなつた。その間に懷かしい父の死を聞いた彼は、切めてはその死骸なりともと願つた甲斐もなく、『設ひ法論なりとも弘通なりとも、弟子の分齊として師匠の法會を怠る不心得。弘通は常の事。先師上人の三年忌は再び廻り來らず。方々如何に扱はせ給ふとも、若しこれをしも許さば千載不孝の罪を許すに等し。上人御存生ならば兎も角も、今日かゝる惡例を貽さん事この日常の忍びざる所、七生までの勘當目通りならぬ！』との嚴命に、泣く〳〵紀念の肌着を押し載いて歸つた。かうして已前よりも一層薄暗い日が、彼の頭上を毎日過去

つてゐたが、ふと思ひ起したのは嚴肅な日興の事であつた。思ひ詰めては箭も盾も堪らなく重須の空が戀しくなつたのであつた。

日興は彼の顏を見るなり、彼が胸深く包む悶えが見え透いて傷はしかつた。操持堅固な日興と熱烈な法弟檀越との間に、日頂は自づと月日の經つのを忘れる事が出來た。

急に二人の上足を頂いた重須の森は、輝きの色が更まつた。『伊豫房は學匠にて候』と、上人から謳はれてゐたゞけに、汲んでも〳〵日頂の智の泉は涸れない。時として日興は日頂と膝を突合せて、夜の更けるのを知らない事もあつた。かと思ふと、鋭い叫が渦卷いて火花が散るかと氣遣はれる程な激論の後は、忽ち豐かな笑ひ聲が漏れて來るのであつた。

殊に日頂が此處へ來たのを力強く思つたのは、戀しい母を喪つた妙國であつた。日夜彼女は御堂の中に彼を見出しては、嬉し涙に咽んだ。

間もなく日頂は、森端れに正林寺を建てゝ、开處て妙國と一緒に住む事にした。

その年の冬になつて、日頂の肉弟の日澄が弟子の日順を連れて、身延から下つて來た。丁度其處にゐ合せた妙國は、新たな涙に顔を仰げる事も出來なかつた。大法に色心を捧げたとは云へ、血の通つた眞の兄妹が、幾十年と云ふ長い時と處とを隔てゝ、再び邂逅つた喜びに引替へて、二人の悲しい運命に日澄は言葉もなく涙ぐんだ。そして悲慘な母の死を思ひ浮べては、互に胸の裂ける程痛つた。

日一日と蘊蓄深い人々の集つて來るのを心私かに喜んだ日興は、學寮を創立しやうと心が動いて來た。

遂に德治元年、御堂の東にある小高い丘の上に學頭寮を建てゝ、重須談所と銘を打つた。而して日目日華などの龍象義虎があつたにも係らず、日澄を推して大學頭の榮位に置いた。

日澄を大學頭に頂いた重須談所は、蟻が甘味を發見したやうに、四方から陸續と學生や信徒が蝟集つて來た。奥床しい學寮の中は多くの人が入つたり出たり、右へ左へ綾をなしてゐるが、活々した日澄の瞳は何時も神秘な光りを漂はせて、寮内の空氣は自づと靜まるのであつた。何物が襲ひ懸つても、この美妙な靜寂を攪亂す事は出來なかつた。——心の底の底までも突き貫いて行く力、散り易い心に統一を與へ……廣い宇宙の中に自分の位置と進路とを明瞭と敎へて呉れるその力強い尊さと、深い同感の温かさとを、誰人も彼の心の叫びから否む事は出來なつた。

三四

日を逐ふて德香道風の薫りは重須の森の草木に泌みた。

斯うして學徒の道は已に開けた。然共、王佛冥合の理想の頂は未だ遥かである。て一日も早くこれに到達するためには、先づ鎌倉幕府の反省を促すより外に途がなかつた。これまでともなく日興は先師上人の遺旨を蹈んで、幾度か國諌もしてはゐたが、談所の力が漸次大きくなるに連れて、理想を憧憬るゝ念もいよ〳〵切になつた。

延慶元年三月彼は、後事の總てを日頂に委ねて、自ら書いた國諌狀に立正安國論を添へて奉行に差出した。目讀された國諌狀も、侮蔑の裡に葬られて了つた。『御不審の箇所も候はずや？』と、進み寄つたけれども何の反響もなかつた。望みの綱は斷れたが軈て繫ぐべき日を信じて、彼は重須へ歸つて來た。優れない日興の顏を見た日目は慰藉の言葉も見出しかねてゐたが、ふと胸に浮んだのは日尊が帝都に上行院を建てた事であつた。『聞くも汚らはし日尊が事ども！』とは云つたが、その聲の裡には云ひ知らぬ喜びの氣分が含まれてゐた。

同じ三年の三月、日澄が死ぬまで學寮の中は何時も明るかつた。その死ぬ五六日前に日朗が尋ねて來た。

日興は躍立つ心を抑へて瞑目した。——筑後房、伯耆房とは互ひに未だ若い時の早い名であつた。二人は岩本の春未だ淺い或る夜から、互に親しむやうになつて、小鳥と小鳥との約束事のやうに明るい日向に樂んでゐた。小ひさい時分から二人でゐたのであるから、何時から解合つた心と云ふ區劃もない。何とはなく唯だ重ねて切つた形のやうに、寸分の差異もない二つの心は、それを置いた所だけ彼と我との名に別れてゐるのみであつた程、個性を沒了した溶和であつた。而も互の間に日蓮上人と云ふ繫がりのある事を知らないかのやうに、平和な日夜に語らつてゐた。

異國の空の闇の夜に慮らず邂逅つた不思議に、互に嬉し涙に暮れたのも、只だ昨日の夢のやうに思はれてゐるのに、實長との間に隔たりが出來てから、疎

むともなく遠ざかつて了つた。――

その長い隔離も一夜の談話にすつかり溶けて了つた。その喜びの涙の未だ乾く暇もないのに、杖と頼み柱と思つた日澄に逝かれてほろりとした。

それは唯だ日興獨りの嘆きではなかつた。重須の森は一時に狹霧が立ち罩めた。

それに懷しい日朗が歸つた後は、嚙みつくやうな寂寥が奧底まで喰ひ込んで行つた。

然共、悲哀のために、聖業までも涙に浸して腐さらせるやうな日興ではなかつた。日順の成熟するまでの大學頭の空位を、日頂の助けに依つて補ふ事にした。

日興の側近く侍して何くれと心を用ひてゐた日華は、その餘暇を見ては鄕里の秋山を訪ねて、邑主の忠知を教化してゐた。その忠知の渇仰は頗る劇烈であ

つた。て、忠知は、土佐の幡田へ所領替になつてから、妙法の聲の聞かれないのを痛く病んでゐた。それで、何時も親しく説法を聞いてゐた日華が、开處へ移住して來るやうにと、幾度か日興に願つて來た。餘りにその請ひが切であるのに動かされて、遂に日華を土佐へ送る事にした。

秋山で弟子にした日妙に種々と云ひ含めて、日華は幡田へ行つて見ると、既に堂宇も築かれて忠知自身で法華堂と呼んで、頻りに彼の來るのを待ち焦れてゐる所であつた。

鎌倉に日蓮上人があつたとのみの噂さだけて、その法義は素より、題目を異國の呪文でも唱へるのかとさへ訝つた程な、法味に枯渇した鄕て、日華が叫ぶ折伏の聲は、極めて奇怪な戯れとしか受取られなかつた。然共、不屈な彼の弘法の餘光は、薄紙を一枚々々剝ぐやうに、知らず識らずの間に、人々の心の中に芽を生いて來た。

三五

再び忠知が讃岐の高瀨に遷るやうになつたので、日興は日仙を彼と一緒に住まはせる事にした。其處でも忠知は法華堂を築いて日仙のために捧げた。

かうして日華と日仙とは、氣脈を通じ乍ら四國の南北に法鼓を鳴らした。

その間にだん／＼日尊の動靜が知れて來た。彼は時に奥州に往つたり時に中國に行つたりした。殊に彼が踵に肉刺の出來る程漂浪し乍ら、教を敷いたのは出雲石見の土地であつた。絶望の巖頭に立つ時があつても、雲間に聳え立つ死身弘法の嶺を仰いて、最早下に暗い死の谿が開いてゐるのも知らなかつた。鬱陶しい絶えず涙ぐんだ空の下に、むら氣な日本海の汐風に肌を曝し乍ら、松江から平田へ、鹽冶太田とさては野獸の通ふ路さへも、おぼろな峯から峯を傳つて仁多の谷間までも廻り行いた。帝都に歸つた彼は、油小路に上行院を建てゝ旺

んに獅子吼した。

木葉も黄昏るゝ秋の一夜、日尊は、鶴林會の程近くなつたのを考へて、何とはなく心細い感じに打たれるのであつた。――指を屈めて見ると、勘氣を受けてから既に十二年！流れて行く月日の跡に殘るものは唯だ悲哀な幻丈けてある。一年として重須の森に影を寫さない事はないけれども、懷しい恩師の姿さへ見る事が出來なかつた。忘れかぬる日目日華などの今日此頃は……と、思ふまい／＼としても又しても纒はるのは大講堂の圓かな集合であつた。

誘ふやうな風が夜の草木を撫でゝ、閉め切つた障子に微かな音を立てると、云ひしらぬ心のどよめきを覺えた。

『再び大衆の中に列る事覺束なき身の不運……如何なる過去世の業因なればとて、かゝる憂目に懸かるのか！』と、彼は仄かに搖ぐ燈火を瞶めて、胸の悶えを訴へるのであつた。

翌る朝彼は重須の森へ忍びの旅を續けるために山門まで出た。

と、息急き乍ら駈けつけた一人の旅僧は、礑と开處に佇れた。

日尊は耳に口當てゝ聲を限りに呼んだ。漸と氣付いた旅僧は、靜かに眼を見開いて、つく〴〵日尊の顔を覗いて、

『御身は日尊の御房にて御座さずや？』

『如何にも某は日尊。して御僧は？』

『已に御忘れ召されしか、寂日房が弟子日妙にて候。それはさて、日尊の御房喜び召され、御勘氣は許され候ぞ！』

『そは誠に？眞實？』

張詰めた氣が急に弛んで、霧のやうなものがむく〴〵と湧いて彼の胸は一杯になつた。

わく〴〵する心を抱いて日尊は、日妙と共に帝都を離れた。

日興の顔を一目見ると日尊は、腹の底から込上げて來る懷しさに、茫然として直ぐには涙さへ出なかつた。

十二年！實に長い暗い年月であつた。その暗い年月が酷たらしくも日興の顔に拭ふ事の出來ない、暗い影を刻んで去つた。『久しかりし日尊！』、その聲にも時が齎らした旋律を含んでゐた。それが唯だ自分獨りの所爲でゞもあるやうな氣がして、开處に居るのも苦しいやうであつた。然共、再び大衆と共に學び共に老後を慰むる事の出來るのが嬉しかつた。

翌る日日興は、日尊が十二年の心血の塊りである三十六箇寺のために、三十六幅の大曼荼羅を認めた。

その年も頓て暮れて、正和二年も過ぎた。

突然日向の入寂した事が知れた。『上足の死！』誰れ言はないが、暗い影を以て人々の胸に響いた。

やがて重須談所の背景として重きをなした日頂の入寂は、より更なる悲痛を以て、日興の心を奥深く刳つた。

止むなく甲州下山に失明を喞つ三位日順を強いて大學頭に呼び寄せた。沈みかけた夕陽は、再び重須の森を照返した。

斯くして十年は夢の如くに過ぎて、元弘元年の冬が來た。

肉に喰ひ入る風は富士の裾野を荒れ狂つて、重須の森を時々嚇かした。何時か灰色の空に縞を織つて粉雪が降り始めた。兎角いぢけ勝ちになつた日興の足は、最早兩親の墳墓へも運び惡くなつた。先師の生きた紀念としての六上足も、既に彼獨りを心細く殘して世を去つた。『死は近けり』との心の囁ぎは此頃から聞く事が出來た。かくて日禪に守らせてゐた兩親の墓を、鰍澤から上野へ移させた。そして雨の日も風の日も二十町の山坂を越えて訪づれた。その往き歸りに富士の高嶺を仰いでは、上人の遺勅を追憶して云ひ知らぬ咲壺に入るのであつた。

三六

その年も去つて、新しい年を迎へた。

寒さと年とは、日興の身體を何時までも同じ場所には置かなかつた。法弟樋越の眼には、彼の老い行く色が能く讀まれた。その間に法弟はだん〳〵登つて來た。

愈々其期の近づいたのを知つた日興は、日滿を呼んて北陸道七ヶ國の導師に、東國法華の頭領を日目に日華を四國の頭領に、日尊を帝都に、日鄕を九州に弘通すべく命じた。

かくして二月七日は來た。それは極めて靜かてはあつたが、如何にも寒い哀し氣な日てあつた。

先づ彼は先師上人に倣つて、日目日華日秀日禪日仙日乘の六人を上足に定めた。然共、餘りにこの六人が年老いてゐたので、更に日代日妙などの六人を新六として稱ぶ事にした。そして亡き後の本門寺は日代が預る事になつた。顫える筆で名殘の遺誡文を染めて、大衆の前に示して嚴かに諭した。

紀念の分配狀は既に何時の間にか出來上つてゐた。

死の頂に立つて過去し方を振返つて見ると、灰色に澱んだ涙の跡も、赤黒く染んだ血痕も、等しく榮えある光りに輝いてゐる。八十八年！長い月日は世を早くした兩親の賜てある。その後半生は宛然に春の如き音律と色彩に燃えてゐる。——太陽の美、月の美、夜明の音樂と眞夜中の沈默、さては樹々の梢を纏ふて落ちる雨の雫……これ等自然のもろ〳〵の姿の裡に、不思議な力と靈妙な光りと神怪な響きとが認められる。彼は茫然として夢幻の境を彷徨ふてゐた。

然共、死の刹那にあつても、彼が忘れる事の出來ないのは、帝闕奏聞の期到らなかつた事てあつた。重い息に絡む聲の中にも力强い命は、日目の頭に降り掛かつた。

遂に漲り勝ちなその夜半に、日興は現實から永への別れを告げた。

その唇の邊に最後の微笑みを呈した。併し、法弟檀越は、涙よりも更に苦い微笑を以てそれを見た。

他人の中に自己を見出さんとする努力！それ已外の幸福を彼は知らなかつた。眞に他の何ものも知らなかつた。而して竟に知らなかつた。總て他の幸福は彼の傍を通り過ぎて了つた。然し、彼はそれに自分の心を決した。そして抑へ難き信仰の火に熱し、身を焦して他のもの丶ために斃れた。

靜かに眠むる彼の胸深く、彼の最も秘密なる心の裡には、什麽な秘實が埋められてゐるのか？誰も知らずにゐるてあらう。然共、彼の犧牲は成され、彼の事業は成就した。

灰色な氣分は急に重須の森に漲つた。

定めの式典はその翌々日行はれた。立ち罩める淚と煙との間に荼毘に附せられた。

七日々々の儀式、百ヶ日の法會も濟んで十一月、日目は、日興の遺る生命てあつた天奏のため、萬年救護の大曼荼羅を懷に、日尊日鄕の二人を伴れて帝都へと出掛けた。

心のみ急ぐ路は兎角に黃昏がれる。濱松豐橋を過ぎて美濃の垂井の宿まで來ると、遽かに日目は惡感を覺えて倒れた。二人が盡す心に暇はなかつたが、何かにつけて旅の身の不足を感じた。それに、餘りの急劇な疾病であつたゝめに、思ふ半ばも屆かなかつた。

物寂しい旅の枕に懸るものは淚ばかりて、往來の人は數多いけれども振顧るものさへない。唯だ僅かに訪づれるものは、臥戸の隙から覗く白雪と溪流の音

ばかりてあつた。

重なる悲哀は、二人の心を底の底まで押し沈めた。止むなく、日鄕は重須に日尊は帝都に、互に淚と共に東西に別れた。

遺骨を首にし乍ら日尊は、京都に着くなり鳥邊山に塚を築いて葬つた。

建武元年、日尊は堅い決意を懷いて闕下に跪いた。後醍醐天皇はその純な志を嘉して二位法印を授けて、四海唱導の綸旨を下された。彼は御賜の勝地京北の野に一寺を建てゝ、再び重須に歸つて見た。

重須の森！薄暗い樹立の間、丌處に日興の一生を偲ぶべく五輪の塔が建てられてあつた。

―(終)―

題重須森之後　安良日將

佳篇千古足流傳　不管滄桑幾變遷
唯有鷲林常在月　芙蓉峰外別開天

大正四年二月十日印刷
大正四年二月十五日發行

重須の森奥附
定價金六拾錢

著作權所有

著作兼發行者　東京府荏原郡大崎町下大崎二百八十八番地　鹽野義觀

印刷者　東京市京橋區弓町廿五番地　高橋郁

發行所　東京神田區仲猿樂町拾七番地　振替貯金口座東京第六九九九番　誠文館

大賣捌　京都市上京區孫橋通新高倉、要法寺内　法性院
大阪市東區淡路町　寶文館　京都市二條河原町　寶文館

三協印刷株式會社印刷

325
344